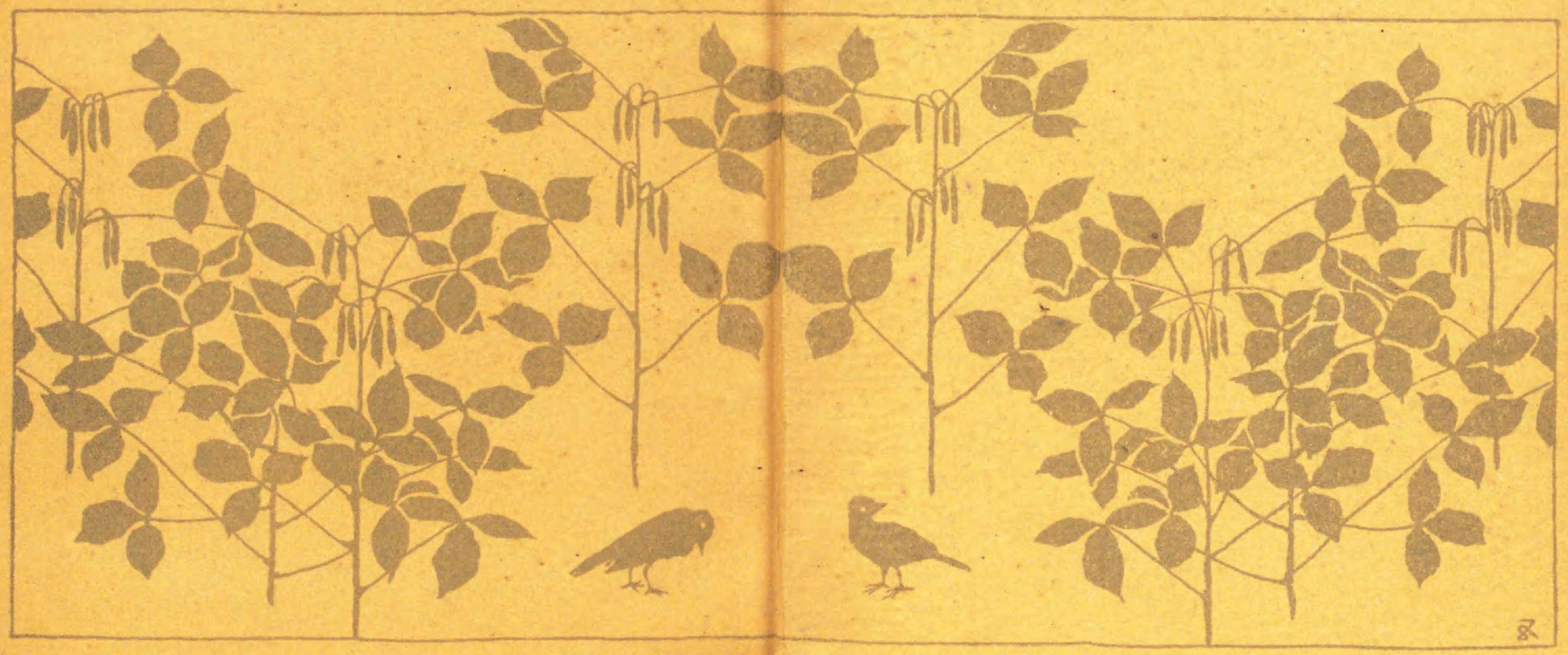
081
Y978
T
00974945



賀茂翁家集

六帖詠草

桂園一枝

全全全

081
Y978
T五
(75)
浦
國立國會
49.4.15
圖書館藏書
2000
DAE
正更量数
974945

緒言

賀茂翁家集は賀茂眞淵の歌文集にして、その歿後二十二年、卽ち寛政三年十一月門人平春海の編輯する所に係る。其例言には「すべて十卷」とあれども、今傳ふる所は五冊に過ぎず。第一第二の兩卷は歌集にして、第三第四第五の三卷は文集也。今本文庫に收むる所はその歌集の部のみにして、頁數の制限上遂に文集の部に及ぶ能はざりしは寔に遺憾とする所也。從つて原本所載の序文及び例言をそのまゝ覆刻し、名亦原本のまゝに「賀茂翁家集」と稱するの、甚だ當を失するものあるを見ざるにあらざれども、一はその歌集の部を原本のまゝに採錄して、一點一字の增減をも施さざりしと、一は讀者をして出來得る限り原本の面影を偲ばしめんとの老婆心と、この二個の理由によりて姑く此失當を敢てせり。切に讀者の寛恕を仰ぐ所也。但、其五卷の大部分を占めたる紀行文「東歸」「西歸」の二篇は、之を別に本文庫「日記紀行集」中に收めたれば、それによりて讀者はよく眞淵の散文の妙諦を窺ひ知るを得ん。眞淵の歌につきては世に既に定評の存する所、又家集卷頭の千蔭の序文

論じて餘蘊なきを以て、今敢て贅せず。

六帖詠草七卷は京都の歌人小澤蘆庵の歌集にして、其板本として世に出でたるは文化元年の事に屬し、門人小川萍流、前波默軒の周旋に成るといふ。別に萍流の編輯に係れる六帖詠草拾遺一卷あり、嘉永の始め上梓せりと雖も、今之に及ばず。蘆庵はもと尾張の國老竹腰氏に仕へて足輕たりしが、性甚だ豪放不羈、到底藩閥の下に其驥足を展す能はざるを觀じ、飄然去つて京に出で、歌を冷泉爲村に學びて遂に一家を爲せり。其歌調多く古今集に類し、其畢を磨する名作尠なからず。又、日夕紀氏の古今六帖を愛誦して措かざりきといふ。六帖詠草の名蓋し之に基づくか。當時澄月、慈延、蒿蹊と共に平安地下の四天王と稱せられ、而も其唱首に居り、本居宣長をして「京都に歌人蘆庵あり東に文人春海あり」と推賞せしむるに至れり。以て其名聲の當時に籍甚たるものありしを知るべし。

桂園一枝三卷は香川景樹の家集にして、その卷頭に載せたる門人平淸樹の序文によりて、よく其集の由來を知るべし。別に桂園一枝拾遺二卷あり、今之に及ばず。景樹はもと因州

鳥取の人、始め歌を淸水貞固に學びしが、後京に出でて香川景柄の門に入り、遂に其養子となりて香川の姓を冒したり。されど後に至りて歌學上の意見養父と相合はざるものあり、分れて別に一家を立てぬ。「我が家の庭の教はそむきても向ふ誠の敷島の道」とは、實に其當時の咏懷也、亦以て彼が所信の存する所を窺ふべし。彼は天才的歌人にして、その所懷を披瀝するや些の遲疑する所なく、苟も自己の見る所に反するものは、其先輩たると名家たるとに論なく、直ちに之を痛罵惡評して止まざりしかば、敵を作ること甚だ多かりしが、京都に於ける彼の勢力は又決して侮るべからざるものあり、一時門弟三千人の多きに及べりといふ。その歌亦天才的にして、語格の過誤、歌調の不整等間々これあるを免れずと雖も、自ら一種淸新の氣に富みて生意潑剌たるもの尠なからず、殊に古來歌道の內に因習し來たれる固陋の見を排除し、斷々乎として別に一派を樹立したるの功に至りては、我歌學史の上に特筆大書すべきものと稱すべからん。

以上三種を收めて本文庫の一編となす。之に參看するに、「琴後集、うけらが花」の一編を

以てせば、徳川時代に於ける一流歌人の述作は、ほゞ之を知悉せりといふに庶幾からん。

大正四年二月

校訂者　塚本哲三

目錄

賀茂翁家集

卷之一

春歌……九
夏歌……二六
秋歌……三四
冬歌……四三
戀歌……五五
哀傷歌……五七

卷之二

雜歌……六七
羇旅歌……七七
物名……八〇
賀歌……八〇
擬神樂催馬樂歌……九三

六帖詠草

長歌……九九
旋頭歌……一二

春

春歌……一二五
夏歌……一九六
秋歌……二五七
冬歌……三二二
戀歌……三五二

雜上

雜歌……三七九

雜下
長歌……四六三
旋頭歌……四六四
物名……四六五
俳諧歌……四八六
桂園一枝
雪
春歌……五〇三
夏歌……五二三
秋歌……五三四
月
冬歌……五五六
戀歌……五七八
花
雜歌上……五八九
雜歌下……六一三
雜體……六二四
長歌……六二四
旋頭歌……六二七
俳諧歌……六二九

賀茂翁家集乃序

いそのかみふりにし世のことは、くもり夜のたときもしられざりしを、いなのめのまけゆくごとくなれるは、わづかに百とせあまりになむ有りける。しかはあれどなほもののけぢめおぼつかなかりしを、朝日子のとよさかのぼりて、八十の隈路のくまもおちず、明らかにしも成りにたるは、吾縣居の大人をはじめとすべし。その中にも、ならの葉の名におふ宮の古言やゝわきまへしらるゝことになりても、其心を得、そのことのはをひろひて、歌にも文にもまねびもちふることはあらざりしを、わがうし、ふることをやがて我物になして、よきをとりあしきをすてゝ、歌にも文にも作られしより、千歳のむかしのことぐさを今の世にまねび得るたぐひもいできにけり。千蔭いと若かりしより、うしにしたがひて、常のみありさま、のたまへりしことを、したしく見もし聞きもしつるに、うしは今の世の人とはことにして、うち見にはさかしきかたはおくれて、心おそ

きさまにおもはれしかど、たまさかにいひいで給へることに、しきしまの大和心をあらはし、ひと言としてみやびならざる事なかりき。筆とりてもの書きたまふを見るに、五百とせも經にけむ筆のあとの如くなむ有りける。こはあまたとし、よるひるとなく古ことをのみこゝろにしめて、いへるより調度にいたるまで、いにしへによりて、いさゝめにも後の世のことを耳にふれ、心にとめ給はざりしかば、おのづから古しへびとのこゝろに成りもてゆきて、其心よりいひ出でもし、物かきもし給ひしによりてこそ、しか有りけるならめ。かくいにしへにつとめたまひし中にも、歌をばことに心高くもてつけてものせられたれば、歌ひとつよみ出で給へるにも、深くかうがへ、あまたたびあぢはへて、によび出でられしなり。うたのさまは、はじめと中ごろとすゑと、三つのきずみありき。はじめのほどは、物學び給へる荷田の東滿宿禰の歌のさまにかよひて、はなやぎたよわきざまなりしを、中ごろよりみづからの一つの姿と成りて、みやびにしてしらべ高く、しかも雄々しきすぢをよみいだされ、よはひの末にいたりては、

いたく思ひあがりて、まうけずかざらず、たれも心のおよびがたきふしをのみ作られき。其はじめのほどなるも、あゐよりもあをしとか、すくねよりも立ちまさりてぞきこえし。をりにふれては、古事記のいとあがれる世のさまなる、またいにしへののりとごとになぞらへたる、あるは中つ世のさいばらのうたひ物をまねびたる、あるはものがたりぶみによりたるなどは、其世々の人のいひだせるにことなることなくなん有りける。さるを一とせ火のわざはひにあひて、おほくうせぬるこそかなしむべき事のかぎりなりけれ。こゝに平の春海のをぢ、わらはより大人にしたがへりしによりて、うしのみまかられし後、家の集ども將くさ〴〵のちりぼへるふみらを、このをぢが家にをさめおけるをかきつめて、板にゑりなむとせしに、さはらふ事有りて、とし月經にけるを、更に思ひおこして、歌にふみに、くさ〴〵のとひこたへをさへにとりとゝのへて、十卷とはなしぬ。うしの遠つおやよりして、現身の世にませしほどの事は、江戸のみなみ荏原の郡品川の東海寺なる少林院のおくつきのかたはらの石碑にしるし

たれば、こゝにははぶけり。眞淵といへるみ名は、敷智の郡の名より思ひよりてつきたまへりとぞ。あがたゐとは、庭を田ゐのさまに作りて、賀茂氏のかばねにもよしあればとて、みづから家の名におほせられたるなりけり。今よりをち、古への學び世にひろごりなば、よゝ此うしをたふとみ、かつこの書をたゝへなむものぞとて、其ことわりをのぶるになむありける。

享和元年十月廿日

橘　千　蔭

賀茂翁家集のおほよそ

一此翁の歌、はやき時にかきつめおかれたるがありしは、まだしきほどのわざなりとて、後にみづからやかれにけり。其中頃よりこなたのは、さらにしるしおかれにたるを、翁なくなりたまひて後、其家かぐつちのあらびにあへりし時にうせにければ、今はつたはらずなん。こゝに今書きつどへたるは、翁にもの學びたる人の、これかれしるしおけると、又あひしれりける人の家に、かずかずちり殘れるをもとめ得たるなり。さるはもれたるも多かるべし。又このかきつめたる中には、かのみづからやかれにけむ歌もありぬべけれど、今はた選みすつべきならねば、得るにまかせて載せつ。

一今かきつめたるには、はやき時の歌を後にのせ、又後なるがまへにいでたるもありぬべし。さるはちり〳〵なるをひろひつるが、くはしく序のしりがたければ、題の序にのみしたがへり。

一おなじ歌にて、かれとこれと詞のことなるあるはうたがはしきを、みだりにさだむべきならねば、一本とてかたへにしるせり。

一長歌は、おほくは眞名もてかゝれたるあり。されど今は皆平假名にあらためつ。眞名は後の人のよみあやまるべきものなればなり。さて題を眞名にかゝれたるをばあらためず。

一文もかきつめおかれたるがうせつるを、今は得るにまかせたれば、もれたるもおほかりなん。さて文にはやき時つくられしと、後にしるされしとあれば、その論じいはれたることの、かれとこれとあひそむけるたぐひもあり。見ん人うたがふことなかれ。

一祝詞碑文のたぐひは、眞名にてしるされたれど、みむ人のよみやすからんために、皆平假名に改めたり。

一書札はいとおほかりつらんを、今は往きかひせし人も多くうせにしかば、もとむべきよしなし。さればわづかにのこれるをあげつるなり。これはかりそめのわざにて、こゝろもせで筆にまかせられしものなめれば、ことさらに傳ふべきわざならねど、猶すてがたくてなん。

一やむごとなきおほせごとをうけたまはり、あるは人のうたがはしき事ども問へるふしなどに、考へてこたへられたる類をば、對問といひ、いさゝかづつかうがへおかれたるものゝはしゞなるをば、雜考とてあげたり。すべて十卷、名づけて賀茂翁の家集となむいふ。

寛政三とせのしもつき　　平春海記

賀茂翁家集

卷之一

春

歌

春の始の歌

をぐらはをとはつ足尾も霞むなり嶺こし山こし春や來ぬらん

のどかなる春は來にけり玉くしげふたらの山のあくる光に

ことに今朝めづらしきかな春の來る方にむかふる春と思へば

年月のくれぬをなにかをしみけん春にしなれば春ぞたのしき

年たてばのべのあそびのゆかしきをけふ來む友に先やちぎらん

梅が枝の花のゑまひを朝ほらけ年の始のさかえにぞ見る

世の人の花鳥にしもならひせば昔にかへるときもあらまし

元日に春たちけるに

081.6
Y

武藏野を霞みそめたる今朝みれば昨日ぞ去年の限りなりける
今日しこそ睦月も春も立にけれあめにかなへる御世のしるしに

年のはじめによめる　春は去年はやく立ちぬ

春はとく來ぬとはいへど大君の年たちてこそのどかなりけれ

春たちける日　去年唐人のみつぎの舟つきたりといふ

東路に春立にけりからふねのつしまの波ものどけかるらし

春のはじめに　大御日嗣しろしめしふあくる年の春なり

あたらしき御世の始に年たちて影のどかなる春日なるかも

ふるさとへ文のはしに

みよし野のかりのすみかに春たちぬいつ故郷へわれもゆかまし

春たちける日遠江なる人々をおもひて

越えゆかばわれことなしとかひがねのあなたにつげよ春の初風

正月三日陸奥の殿の姫君歌をとのたまふによみ

てまゐらせける

三冬つき春立ちけらし久方の日高見の國に霞たなびく

正月十四日に春の立ちける日よめる

東路にありてふ關のなこそともとどめぬ春のなどおくれけむ

家に歌よみけるに春日望山といふ事を

見わたせば天の香具山うねび山あらそひたてる春霞かな

其むしろに名所若菜を

春日野の雪間のわかなつむ時はみどりの袖もよしぞありける

朝霞

山高みいづる日影をまちとりて四方にほへる朝がすみかな

霞を

むらさきのめもはるゞといづる日に霞いろこき武藏野の原

海邊早春

みちのくのちかの鹽がま春來れば烟よりこそかすみそめけれ

春　水

春風に氷ながるゝみぎはには水のこゝろのゆくも見えけり

天中川

すはの海や氷とくらし遠つあふみ天の中川みぎはまされり

春風春水一時來

つくば山しづくのつらゝ今日とけて枯生のすゝき春風ぞふく

春色浮水

こほりゐし志賀の浦波たちかへり白ゆふ花に春は來にけり

うぐひすを

うちわたす竹田の原の雪のうちに鶯なきぬ春のはつこゑ

春鶯呼客といふことを

花のもとにさそはれ來てぞしられける人をはからぬ鶯の音を

正月家に歌よみけるに春神祇を

大王の園のまつりにとる弓のはる日たのしき神あそびかな

そのむしろに贈答の歌よまんとて縣召の比人に

といふ事を

高きにもうつるためしをよそに見て谷の古巣の鶯ぞなく

枝

返　し

日の光いたらぬ谷もあらなくになに鶯のいでがてにする

枝

踏歌の夜人にといふ事を

來ぬ人をはしのつめにもまちて見むあらればしりの夜は更けぬとも

直

返　し

あやなしや竹川うたふ歌垣に君もこもらば手もとらましを

賭弓

わしといひ鷹とわかれてわたるかなけふのいく羽の雲の上人

のこりの雪

めづらしと見初しほどになりにけり遠山のまにのこる白雪

かけまくもかしこき下つけの國ふたら山にいはれます大神の、むかし遠つあふみのくに曳馬の城をしきましゝ御時、御狩のをり〳〵、竹山が家の梅こそおもしろけれとて、其庭に御馬よせさせ給ひ、かをりさかえたる枝に御鷹をすゑおかせたまひて、御酒きこしをしめでましゝを、今は百よりおほくの年を經ぬれど、その梅のみづ枝さしつぎて春ごとににほひをまし、此家もたぐひひろくさかゆることを、おのれしも母とじのゆかりありてかたじけなく御ゆゑよしをつたへ承はりよろこぼひて、ふるきしらべをうたふ

むかし君み袖ふれけん梅がえのいまもかをるかあはれそのはな

庭落梅

とふ人の笛もきこえて垣の内に梅ちる風のおもしろきかな

水郷柳

六田川風ものどかに行く水のみどりによどむ柳かげかな

柳ある家に人來れるかたを

春風のあわをによれる柳もてとひ來る人をとめんとぞ思ふ

む月の末、津輕爲春のもとにはじめて行きけるに、酒さかなとりまかなひ物語しけるついでに、冬がれの垣ねもけふこそ初花のかをり覺ゆれなど歌よみていだしけるに

初花のをりから君をとひつるは我こそ春にあへるなりけれ

早蕨

いざけふはをぎのやけ原かき分けて手折りても來む春の早蕨

題しらず

すがのねの長き春日になりぬればこゝろずさみぞ暇なかりける

家に歌よみけるに二月餘寒を

二月やまだ雪さゆるいこまやま花の林はそらめのみして

同じ題を在滿が家にて

きさらぎの空さえかへる山風は冬にまされるこゝちこそすれ

また森鶯を

春ふかき老そのもりの鶯は人もすさめぬ音をや鳴くらん

二月梅

色も香もとりならべたる梅の花咲くこそ春のもなかなりけれ

きさらぎの末つかた櫻の花もやゝ盛なるころ、伊久米の君のおはしたるに、庭をはたに作れりしが、

すゞなの花のさかりに咲きたりければよみてい

だしける

春さればすゞな花咲くあがた見に君來まさんとおもひかけきや

二月晦日延亨三年本所といふ所に火おこりて、家ども多くやけにけり、その夕つかた、風もあらく、そらのけしきあかくちりだちて、こゝにしも火あるかと覺えたるを、その夜亥の初ばかり、十町ばかりみなみよりまた火いできて、ほどなくおのが家もやけぬ、むかしよりこゝろつくして考へつゝ、物おほく書そへたる書どものあれば、これをばくらにもいれじ、いかで便よからん所へわたしやりてむ、今はとてのがれいでなん時、從者の手ごとにもたせむとかまへて、先その事をとりしたゝむる程に、調度

どもは心にもいれず、たゞくらの戸ぐちにひぢり
こぬりまかなはせて立いでぬ、ほどなくみな烟に
こもりにければ、源の簡がもとへ行きて夜をあか
しぬ、なにばかりの家ならねば、なごりもさしもあ
らねど、また草の庵結ばむまでは人によりてあら
んもくるしかるべし

春の野のやけ野の雲雀床をなみ烟のよそにまよひてぞなく

おのがあたりより火いよゝさかりになりて、明日
のひるまでもつぎ〳〵やけ行きにけり、いく千よ
ろづの家々か烟となりけん、人なども死にけりと
いふなり、またことしは所々に火あるは、ぬすびと
のわざも多しとて、からめてかうがへらるなども
いふ

田にもあらぬ千町の家をやきすててつくれる罪の程ぞ知られぬ

春の山ぶみ

山越えて霞む梢を見わたせば繪によく似たる物にぞありける

春三河のざう（掾）をおくるといふ事を

宮道山春行く袖の深みどり秋はあけにも染めざらめやは

遲日

菅の根の長見の濱の春の日にむれたつたづのゆたに見えけり

桃

賤のをが園生の桃の花ざかりやぶしもわかぬ春の色かな

よし野の山の花ざかりを見やりて

世の中によし野の山の花ばかり聞きしにまさるものはありけり

花の歌とて

咲きちるはかはらぬ花の春をへてあはれと思ふことぞそひゆく

雲とのみまがふ櫻のさかりには心もそらになりにけるかな

山櫻咲くと見しより吉野川ながるゝ花もかつぞたえせぬ

大路ゆく人の袂も櫻色に染むるぞ花のさかりなりける

うら〳〵とのどけき春の心よりにほひいでたる山ざくら花

花のもとに弓いるかた

さくら花花見がてらに弓いればともものひゞきに花ぞちりける

關路花

山ふかみおもひのほかに花を見て心ぞとまるあしがらの關

關花を人にかはりて

吹く風をなこその關の山櫻心づからぞちらばちらまし

不破關花といふことを

さくら咲くふはの山路は關守のすまずなりても人をとめけり

花下送日といふことを

山櫻ちれば咲きつぐ陰とめて大かた春は花にくらせり

谷中の柿本社にて歌よみけるに社頭花といふことを

ことのはの色香にあける神ながら猶みづがきの花やめづらん

上野の花ざかりに

かげろふのもゆる春日の山櫻あるかなきかの風にかをれり

長門守の東のひえの花見に福聚院に遊び給ひける

る日題をさぐりて風靜花芳といふことを（よべ雨ふりて今朝はれたり）

よるの雨の露だにちらず櫻花にほふばかりのけふの春風

あるひとにさそはれてやまざとにいたれりける

に柴の戸の花ざかりいと心のとまりて覺えけれ

ば

おもひきやうき世の人にさそはれて塵のほかなる花を見んとは

伊久米の君のもとより櫻の枝にそへて「よしや花ちるともいかでをしむべき色香をさそへ庭の春風」とある返し

君がけふをしへしものを今よりは花さそふとも風はうらみじ

山里へ花見にまかりたるこゝろを人々とともに

山里は岩ほのなかと聞きつるを花にこもれる所なりけり

遠つあふみの引馬の古城は、むかしふたらの大神のふとしきましゝ城なり、そのかたへにさかあり、ひくま野へのぼるところなり、そのさかのうへにいまはさかもとのぬしすみ給ふ、垣のうちにむかしの大神のめで給へるさくらの、今もひこばえさはにしみさびてあるを、ことしことのついでにと

ひけるに、歌よめとありければよみける

あか駒を引馬の坂のもと櫻もとの心をわすれでぞさく

わらはあそびに竹の葉もてつくれる舟に櫻の花をつみてながしたるを見てたはぶれに人々とともに

すくな神つくれる舟に木の花の咲や姫こそのりていづらめ

ふる郷に櫻のちるを見るといふこゝろを

みよしのをわが見に來れば落瀧つ瀧のみやこに花ちりみだる

志賀山越

花をふくあらしの空は雪ながら袂ぞかをる志賀の山越

春山の旅のこゝろを

しなのぢのおきその山の山ざくら又も來て見むものならなくに

三月枝直が家にて歌よみけるに羇中花を

霞立つながき春日にながめして花にも物をおもふたびかな

さくらの花のちりたるを

菅の根の永き春日に袖たれて見むとおもひし花ちりにけり

上野にて

ちる花の都のふじやいかならん東のひえは雪とこそふれ

すみれを

故郷(ふるさと)の野べ見にくればむかしわが妹とすみれの花咲きにけり

雲雀

霞たつ春野の雲雀(しはり)なにしかもおもひあがりてねをば鳴くらん

國原

雲雀あがる春の朝けに見わたせばをちの國原霞たなびく

苗代

苗代(なはしろ)の水口(みなぐち)まつりしめはへて賤が業こそむかしおぼゆれ

河山吹を人にかはりて

山吹は下ゆく水も花なるを心してさせ春のかはふね

山吹咲きたり見る人あり

故郷は春のくれこそあはれなれ妹に似るてふ山ぶきのはな

春のくれに春道がなり所をとひて唐棣花を

この園はまたも來て見む宮人の袂おほえてはねず咲くころ

殘春

花のみなちりての後は春さへにのこる日なくもおもほゆるかな

春のはて

ひたちには田をこそつくれしめはへてけふ行く春を誰か止むる

夏歌

山家首夏

庵ながら昨日の春の花も見つさてこそきかめやまほとゝぎす

山ざとは夏のはじめぞたゞならぬ花の人めもすぎぬと思へば

思餘花といふ事を

いかならん熊野のおくを尋ねてか夏にものこる花にあはまし

おそざくらを

おくれては物すさまじく見ゆる世に今も櫻のめづらしきかな

あしがらの關の山路をこえ來れば夏ぞさくらはさかりなりける

新樹

夏の來て昔にかへる玉がしはとるともつきじにひかゞみ葉は

枝直が家にて庭樹結葉といふことを

陰ふかむ青葉のさくらわか楓夏によりてもあかぬ庭かな

春道がなり所に友だちかいつらねいきて

苦丹咲くそのふの木々の若みどり夏このましき宿にもあるかな

あかなくにあすもさね來むにほどりのかつしか小田の苗もみがてら

賀茂祭

年ごとにけふの葵をかけまくもかたじけなしや賀茂の氏人

かみゐにさなへうゑるかたかけるを

いそぎてぞ早苗はうゑんあし引の山時鳥なきにしものを

屏風に雨ふるに人多く早苗とる所

大御田のみなわもひぢもかきたれてとるや早苗は我君のため

さみだれふるに山下の田うゑるかた

さなへ草うゑる時とてさみだれの空も山田におりたちにけり

採早苗

きのふけふ時來にけりと時鳥とばだのおもに早苗とるなり

郭公まつこゝろを

初こゑをみやこにいそげ郭公山がつならぬひとこそはまて

題しらず

なかざらむ物とはなしにほとゝぎすつらき時こそ猶またれけれ

郭公の歌あまたよみける中に

たちばなのかをれる宿の夕ぐれに二こゑなきてゆくほとゝぎす

市郭公

しのび音をあらぬ名のりにまがへとや市路に鳴きて行くほとゝぎす

故郷郭公

橘の島の宮居のあととめてなくはむかしのほとゝぎすかも

夏の比人々とともにふりにし世をしのぶ歌よみ

けるにほとゝぎすを

君ましゝむかしの花のふぢ原をほとゝぎすこそ今もとひけれ

京にて物ならひし比したしかりける人のいまは

いせの國にあるがもとに文のはしに

鈴鹿川はやく聞きつるほとゝぎすいせまで今もおもひやるかな

山ざとへほとゝぎす聞きにまかりて

うの花を手ごとにをりてかへらまし山郭公聞きししるしに

五月家に歌よみけるに船の中なる人郭公きくか

たを人々とともに

郭公おのがさ月の山川をこゑにのりてもさしくだすかな

名所郭公

つくば山花たちばなの咲きしより鳴くこゑしげき郭公かな

郭公頻

このさとはさらにしたひもあへぬまで過ぐれば來鳴く郭公かな

家に歌よみけるに山家五月雨といふことを

五月雨はをやむもわかず谷の庵に雪よりおつる眞木の下露

そのむしろに夏鳥を

みじか夜のはかなさつげて鳴くそらのをりあはれなる朝烏かな

又夏祝を

ふる雨に早苗をうゑて國の名のみづほの秋をまつぞ樂しき

五月宴菅原氏家時作歌

橘のもとに道ふみ行きかへりもとつひとにもあひにけるかも

あし引のいはねすがはらいくつ夏しげり行くらん岩根すが原

夏　虫

庭のおもにそこはかとなき虫のねもをりあはれなる夏の夕ぐれ

故郷螢

ふるさとのみかきがはらの夏草によるはもえつゝとぶ螢かな

紀伊宰相の君のもとめたまふによみてまゐらせける三首の歌　樹陰納涼

すゞしさの大路の柳陰ごとに馬もくるまもいこはぬぞなき

里蚊遣火

ゆふさればかやり火たかぬ宿もなしこのさと人は月や見ざらん

晩　夏

行く雲もほたるの影もかろげなり來む秋ちかき夕風のそら

夕立をよめる

にひた山うき雲さわぐ夕だちにとねの川水うはにごりせり

おほひえやをひえの雲のめぐり來て夕立すなり粟津野の原

夏風を

吹く風のこゝろは常にあらめども夏こそ人にしたしまれけれ

みな月初の六日にかつしかの西にある秋葉の社

にて歌よまんとてその別當のもとめけるにとも
だちかいつらねてふねよりぞ行く、對陰避暑とい
ふ事をかねてよみていだしける
風やどる夕のもりの下すゞみ秋の葉そよぐこゝちこそすれ
水邊納涼
立ちよれば山陰すゞし夏み川夏てふことやなみのぬれぎぬ
高殿にすゞめるかた
たかきやは涼しかりけりあらがねの土てふものし夏にやあるらん
家に歌よみけるに晩夏といふ事を
空高く螢をさそふ夕風の身にしむまでになれる夏かな
おなじむしろに大井川の夏を
大ゐ川わか葉すゞしき山陰のみどりをわくる水のしらなみ
わがやどをしも

むぐらはふわがやどをしもたゝくなる水雞やよはのなさけしるらん
なつと秋との
よしの川みそぎにながす麻の葉や夏と秋との中におつらん
みちのくの岩城の君の許にて物がたり聞えける
時、夜ふけぬべしまかでなんといふを、こよひは六
月つごもりなり、秋のおそき年のみなづきばらへ
のこゝろをよまんとて、あるじもよみ給ふに、おの
れも筆をはしらしめて
くにつ罪はらふこゝろのすゞしきはあめに知られぬ秋にぞありける
夏ばらへするかたかける繪を
よろづ代とひがしも西もとなふなりはらへのこせる罪やなからん
枝直が家にて六月祓を
天つ罪はらふゆふべは雲ゐ吹く風もすゞしくなりにけるかな

おなじむしろに夏日といふことを
わたの原とよさかのぼる朝日子のみかげかしこき六月のそら

秋歌

山べの庵に秋の來たる心を
今朝はしもたけのはやしぞそよぐなる世は秋風の立ちやしぬらん

早秋

うきものとおもひもいれで秋風をうらめづらしみすぐすころ哉

残暑

宮城野や秋なほあつき木のもとの露なき草に風をまつかな
秋も猶あつきゆふべ、人々とともにすみだ川の下
つかたの大川てふあたり舟こぎわたりけるに、い

とすゞしかりければ
からろとる大河のべのすゞしさは初かりがねも聞くばかりなる

秋の歌とて

秋風はたちにけらしなさらしなやをばすて山のゆふ月の空
大伴のみつの浦なみ吹寄せてまつばらこゆるあきのゆふ風

源之眞おもきやまひおこたりて後、つかへをかへ
しけるころ、主のめぐみふかきことなどこまやか
にいひおこせて、さて七夕の歌ども見せけるを、そ
の歌返しやるとて、傍に書きてつかはしける

天の川かいのしづくを身にうけてこよひやいかに涼しかるらん

七月なぬかの夜

たなばたのあふ夜となれば世の中のひとのこゝろもなまめきにけり
こよひまで今宵をまちてこよひあけば又の今宵をまたんとすらん

七月七日家に人々來てまつりのかたするにおの
おのよむ

たなばたの天ついもせのことをだにこちたく誰かいひつたへけん

七日の夜の歌

天の原とほき川とのゆふなみに今やこぐらんともしきをぶね

たなばたのあふ夜の秋の初風にをとこをみなの花も咲くらし

あまのがは見つゝしをれば白たへの吾衣手に露ぞおきにける

七日の夜雨のふりければ

夕月夜空もあやなく降る雨にこぎなまどひそ天の川をさ

枝直の子生れける比文月十三夜に人々集りてよ

ろこびいふに、月のおもしろかりければ

この宿にさゝらえをとこ生さきの光こもれる千代のはつ秋

わかの浦の蒹してつくれりとて、人の御もとより

賜りたる扇に書きける、ふんづきばかり

紀の海はすゞしかりけりあしべより波うちはふる秋のはつ風

とほつあふみの佐益の中山のにしにつゞきて、今

はあはがだけとて高き山あり、延喜の式に安波々

神社とあるこれなり、そのかたゐにかきたるに、そ

のふもとに旅人あり、それがこゝろをよみつ、時は

秋のはじめつかたなり

東路は衣手さむしし雲のあはゝがたけの秋のはつ風

人の柿本社に奉るとてもとめけるに、初秋風とい

ふことを

風のおとのいく代雲ゐに聞えあげて高つの山に秋は來ぬらむ

秋風

松のひゞき荻のさやぎのさまゞに聞えて絶えぬよはの秋風

荻

百草のおほかる中にわきてなどうたて吹くらむをぎの上風

萩漸盛

鹿もやゝ戀のさかりとなりぬらし野べのこはぎの色まさり行く

萩

をじかふす野べの秋風吹きそめてほころびにけりはぎが花妻

萩に對ふといふこゝろを

萩が花かきねもたわに咲く時は野べもおもはぬものにぞありける

旅人鹿の音聞くかたを

さをしかのつまとふよひの岡のべに眞萩かたしきひとりかもねん

旅衣わがつまならぬ萩原にしかの音聞きてひとりかもねん

月の歌とて

遠つあふみ濱名の橋の秋風に月すむうらをむかし見しかな

すみの江のうらわにたちて月みればなにはの方にたづぞなくなる

さゝなみのひらの大和田秋たけてよどめるよどに月ぞすみける

はりま路やゆふ霧はれて久方の月おしてれりいなみ野のはら

大船に小舟引きそへますかゞみすみだがはらに月を見るかな

十五夜くもりけるに

天の原八重棚雲をふきわくるいぶきもがもな月のかげ見む

八月十六日永昌がなり所に人々集りて、屏風に川邊なる家に月見るにまらうどの來るかたあるを、所につけたる繪なればこの心よまんとて、ともに

よみける、あるじの所に

さゝらなみよるしもかくてとはるゝは月こそ宿のあるじなりけれ

まらう人のところに

清らなる秋の川べにすむやどの君こそ月のあるじなりけれ

山家月

秋のよの月清ければなほもあらずいでてこそ見れ杉たてる門

夕月

萩原や庭のゆふ露うつろひてくれぬひかりはあへぬ影は月にぞありける

枝直が家にて松間月といふことを

都にもまつの木のまの月見ればみやまの秋のこゝちこそすれ

水上月

たつしぎの影ばかりをやくまと見ん野澤の水のふかきよの月

明石浦秋

明石がた有明の月をしたふまにあはれをそふる波のあさ霧

八月廣澤池眺望といふことを

都人見ぬ海山のおもかげも月にうかべるひろさはのいけ

月見ればみやこのうちも海山のありけるものをひろ澤の池

秋水郷

あしがちる難波の里の夕ぐれはいづくもおなじ秋風ぞふく

秋神祇

秋風の立田の使たちしより世はゆたかなる穂なみこそよれ

雁を

見わたせばほのへきりあふさくら田へ雁鳴きわたる秋のゆふぐれ

田づらのいほりにて

露さむき門田のをしね月照りて雁なきわたる秋のよな〳〵

九月十三夜縣居にて

秋の夜のほがら〳〵と天の原てる月影にかりなきわたる

こほろぎの鳴くやあがたのわが宿に月かげ清しとふ人もがも

あがたゐのちふの露原かきわけて月見に來つる都人かも

こほろぎのまちよろこべる長月のきよき月夜はふけずもあらなん

にほどりの葛飾早稲のにひしぼりくみつゝをれば月かたぶきぬ

九月十三夜知陳が家に月見ける時洲濱に紙もて

鶴のかたをつくり、松の葉をしきてかひこを多く

おきたり、いはふ心をよめとすゝむれば

鶴の子のよを長月の影なれば見るかひもある宿の秋かな

新むろにて

眞木柱ほめてつくれる高きやに千秋の月を見そめつるかな

野分せしあしたに

野分してあがたの宿はあれにけり月見に來よと誰につげまし

九月ばかり犬上衛が家にて初紅葉を

心とく來ても見しかな山しなの石田の森のもみぢそめしを

紅葉

よのつねの色ならめやはさがの山もみづる秋のいでましどころ

詠菊

あたら代のたひらの宮にめでそめて菊は千ぐさになりにけるかも

菊の花を折りて人のおこせたりければ

よはひをものぶべき君が宿の花かざすに老ぞまづかくれける

惜秋

おのづからもろき木の葉の秋なればくるゝを何にかこちだにせん

秋のはて

さをしかのたち野の原に秋くれて今いく夜とかつまを戀ふらん

冬歌

神無月の一日に衣ばこのふたをひらきて

かみなづき今しも春もゝ又も春としいふめれば櫻いろなるそでやかさねむ

伊久米の君のもとにて十月更衣を

かふれどもいとゞあやなき衣手にもみぢだにちれ翁(おきな)さびせん

かみな月の紅葉をよめる

かみな月かた山あらしのどかにて紅葉みるべきけふにもあるかも

ちゝの木のちゝぶの山の薄もみぢうすきながらにちれる冬かな

十月ばかり人に山づとをおくるといふ事を、茂樹

が家にて人々とともに

冬立つやあらしの落す椎がもと山にも身こそやどしわびぬれ

十月ばかり山里にやどるといふ心を

くれ行けばまがきに鹿ぞそよぐなるたゞかくながら秋やなきけん

時雨をよめる

高鴨ははやくしぐれぞふりにけるかづらき山のみねのうき雲

神無月たちにし日より雲のゐるあふりの山ぞまづしぐれける(さがみなろぃ)(はれくもりするぃ)

時雨陰晴といふことを

かみな月今日もしぐれの晴れにけり曇(くも)りにけりといひてくらしつ

朝時雨

けふもまたかくていく度しぐれましみねの朝日に雲かゝるなり

かみな月軒端の露のおきいでてけふもしぐるといはぬ日ぞなき

寒蘆をよめる

つのくにの難波のあしの枯れぬればこと浦よりもさびしかりけり

寒草

かれにける草はなか〳〵やすげなり残るをざさの霜さやぐころ

世の中はゆふ霜さやぐおきな草枯れてもやすき時なかりけり

枯野

つくばねの緑ばかりをむさし野の草のはつかにのこす冬かな

寒樹

日をさへし大河のべのくぬぎはら冬は風だにたまらざりけり
冬がれに里のわらやのあらはれてむら鳥すだく梢さびしも

夜落葉

山風のふく夜の月におとはして曇るともなくちる木の葉かな

名所落葉

佐保過ぎてたがとるぬさとみだるらん奈良の手向の風の紅葉

冬月

さよ中と夜はふけぬらし我宿の庭に霜おきてさゆる月影

湖上冬月

すはの海や雪げのそらの雲間より氷をてらす月のさやけさ
ふゞきせしいぶきおろしのさえくれて月にしづまるよごのうら浪

千鳥を

かまくらのよるの山おろしさむければみなのせ川に千鳥なくなり

楫取魚彦がもとにつどひて、その所の歌とて

ゆふさればうなかみがたのおきつかぜ雲ゐに吹きて千鳥なくなり

霰

ありま山うき立つ雲に風そひてあられたばしるいなみ野の原

雪のふりけるあした、枝直のもとより人おこせたるに、何ごとをもいはでかへりにけるはこゝろもえず、此人は朝しもをかしきものにいひければ

朝ごとの霜をあはれといふ君はけふの雪をばいかゞ見るらむ

といひやりつれば、例の朝いをおどろかしつるなりけり、それが返しに、暁のほどこそをかしかりけれ、けさふるものとやおぼすらむ、「あさいして霜をだに見ぬ君はしもよるの雪をばいかでしるべき」とあればまた

おもひねの夢にまさらぬ初雪をよはにふりぬと誰かいふらん

またある日よべより雪のふりけるに、枝直のこなたよりも消息せざるをにくむなるべし、詞はなくて、「白雪のふりとふるともこゝろなき人をばまたじとはんともせじ」とある返し

しら雪のふりとふりなば心なき人もやとふとまちにしものを

また枝直「ふる雪のおもはんことをおもはずば人をもまたじ人もまたじを」

返し

人や來む我やとはんとおもふまにわくる心は雪ぞしるらん

また枝直「とひとはず君が心をいかにぞととへども雪はこたへざりけり」

返し

物をこそこたへずあらめふりはへて今朝はこゝろの雪とやは見ぬ

同じ日正房がもとより、「あとをしもいとはぬ君が宿ならばとはましものを今朝のしら雪」とある

にたはぶれてこたふ

むかしたれ雪には跡をいとひそめて君がかごととけふなりにけん

詠雪

ぬばたまのはしたてのくらはし山に雲合きらひ高市國原雪ふりにけり

雪の朝遠き里を望むといふ心を

今朝朝ぼらけ見ればふもとの里はわかねども烟ぞ雪の上山にたなびく

すゝきにかゝれる雪のをかしかりければ、友のもとへ

おもひやれ枯生のすゝきうちなびき友まちがほの雪の垣ねを

ことしふせやをしめて竹などうゑけるに、しはす

ばかり雪のふりければ

しめおきしまがきになびくくれ竹のよに珍しく見ゆる雪かな

かくれ家に雪のふりたる心を

わが庵の庭には跡もなかりけり落葉がうへにふれるしら雪

題しらず

おもふ人こてふに似たる夕かな初雪なびくしののをずすき

屏風に、雪のふりたるに人々舟にのりて見るかた

花ならばこぎよせてこそたをらまし入江の松にかゝるしら雪

杜雪

身のよそにいつまでか見む東路のおいそのもりにふれる白雪

閑居雪

冬ふかき柴のゝ冬ごもる庵のとぼそをまれにあけて竹にかゝれる雪を見るかな

山館見雪

雪ふれば咲くや梅津の山里ににほはぬ花は人もとひこず

雪中遊興

野も山も冬はさびしと思ひけり雪にこゝろのうかるゝものを

雪中眺望

雪はるゝあさけに見れば不二のねのふもとなりけり武蔵野の原

雪のあした

初みゆきはれたる朝に見渡せば里のけぶりもめづらしきかな

おきいでて暁ふかく見し雪の今朝まで月にまがふ庭かな

冬遠情

立かへり今も見てしが遠つあふみ濱名の橋にふれる白雪

うちきらしみ雪降るなりよしの山入りにし人やいかにすむらん

家に歌よみけるに、冬眺望を

ふる雪のしらふの鷹を手にするゑて武蔵野の原に出でにけるかな

おなじ時贈答の歌人々もよみけるに、神樂の夜人
にといふ事を　枝直

宮人の弓といへばとうたふ夜もひかれぬ身こそし
ななかりけれ

返し

四方山のまもりなりてふ梓弓ひきみひかずみうらみやはする
遠江のくに磐田のやしろの神主菅原信幸が母の

八十の賀の屏風の歌、十二月神樂する所

とのもりの白くたくなる大御火のよにおもしろき神あそびかも

新嘗會

たふときやすべらみことは神ながら神をまつらすけふのにひなべ
まだきにさける梅

大かたは春だに花のまたるゝをとしの内にもにほふ梅かな

年のくれに友をとふ

年たゝば春野のわかなまづつまんかねごとしにぞけふは來にける
年のくれに祓するかたを

もろともにつもり來にける天つ罪雪より先にまづやきゆらん

歳暮雪

野も山もみゆきふれどもゆづる葉の春の設はをりもまどはず
年のとく暮るゝ心をみつねが冬の長歌によりて

今朝よりはしぐるゝと見えし冬の日の傾くまゝに年ぞくれ行く
としのくれに

くれてゆく年のはや瀬の氷上は白き筋こそ落ちまさりけれ
これはくしけづりければしらがのまじりてけづられけるにおどろきてよめるなり

年ふりてもとの身ならぬこゝろには春もむかしの春をやはまつ

おどろけどかひなきものを今よりは月日もよまじ年もかぞへじ

春をまち年を惜みていづかたにふるとしもなくよぞふけにける

しはすに閏ありけるとしのくれに

くはゝれる冬をもたゞに過し來ておろかなる身を今年こそ知れ

都のかたへにすまへど、人なみ〳〵なる身にしも

あらねば、春をむかふる業とてなにごとをも設け

ず、さるは門さしてなどもあらねば、のどやかにの

みもあらず、木にもあらぬ吳竹のよの中には法師

ばらといひけんもおぼえて、われだにいひしらず

なん、人々のまで來てかたらへる歌を聞けば、とり

どりにをかしかれど、もとよりおのが心をやるわ

ざなれば、人にならふべきにもあらず、よしとてう

らやむべきことわりもなし、たゞ心やりに、

年くれて松をもたてぬすみかにはおのづからなる春やむかへむ

戀歌

はじめてあへる

初尾花むすびそめける夕露に秋てふ風はふかずもあらなん

あひ〻

思はぬを思ひしほどにくらぶれば思ふを思ふことぞすくなき

わすらる

風のこゑむしの音をだにきかじやはなどみし秋をわすれはてぬる

しらぬ人

おもひつゝぬればあやしなそれとだにしらぬ人をも夢に見てけり

舊戀

かれしそのむかしばかりはしたはぬや我さへうとく今はなりけむ

逢　戀

かりそめのたのめと人やおもふらんなきてわたりしみよし野の里

思高戀

わが戀は雲ゐに高きあし引の山のしづくを袖にかけつゝ

知身戀

これぞこのうき身しらるゝつまなるをつらしと人を思ひけるかな

つらき身にあるべきかはとおもひしるおなじ心のいかでこふらん

待空戀

残る夜も鳥より後にまちえたるならひなければなく〳〵ぞぬる

寄瀧戀

いはばしる瀧つ山川とこなめに絶ゆることなくあふよしもがな

寄霞戀

はる來べき方こそなけれねぬるよの夢より霞む春のあけぼの

おきてわかれし

今はたゞ袖の氷となりにけりおきてわかれしをふのした露

春のくれに人をおもふ

今もかもこじまがさきにほふらん君に似るてふ山吹のはな

哀傷歌

卯月のはじめつかた茂子のせの身まかりつと聞

きて花などおくりけるにさしたる歌

世のなかのはかなき時はほとゝぎすなくねも殊にうらぶれにけり

美樹がちゝのみまかりたるのちひとゝ〳〵夕郭公

といふ題をかの家によむとて、その歌見せたるつ

いでによみておくる

藤衣ふかくそむてふすみの色の夕ぐれに問ふほとゝぎすかな

あるものの師の忌とて名所懐舊といふ事を人の

もとめけるに、四月の末なりければ、

ほとゝぎす今きの岡にこゑきけばたゞなき人のたよりなりけり

五月のころいときなき子をうしなひける人のも

とへ

さみだれのふるにますらん汨川せくべきよしもあらじとぞおもふ

六月十四日はこぞ暉昌が身まかりし日なれば、と

しごろのむつびわすれがたきに、たよりにつけて

いひつかはしける

天の原ふじの高嶺の白雪のきえぬる時と聞くぞかなしき

利秋としごろわづらひて久しくあはざりけるに、

七月七日に友古がまで來て、いにしみな月になん

身まかりにける、今はみなぬかばかりにやなりぬ

らんといふを聞くに、心しれる友なりければ、かへ

すがへすも悲しく思へどかひなし、年比好みつる

ことにて今はのきはにも歌よみつるなどかたる

を聞きて、いとあはれのすゝむに、くちずさめるか

ぎり書きて友古のもとまでおくりつ、露の手向草

にもとなり

大かたもおどろかれぬる秋風につねなきこゑのそふぞかなしき

なき人はいく七日にかなりぬらん彦星ならばまたも見ましを

きくからにくやしき事のくやしきはあはで經るまの別なりけり

今はよになしと聞くこそかなしけれあるにも逢はで年はへぬれど

秋風の空に今はと行く螢見る〳〵きゆる世にもあるかな

これはかの終の日に螢の曉に影消ゆるよしを

よみしゆゑに、それになぞらへたるなり

荷田在滿にはかに身まかりける後、横瀬侍從貞隆の
もとよりふぢばかまにさして、「世の中はあだな
るものと知りつゝもかゝらんとしもおもひきや
君」「あたらしや露にしをれしふぢばかまかぐは
しき名は世にのこれども」「秋風に荒れにし宿の
女郎花こ萩がうへもいかゞとぞ思ふ」答とりあへ
ず書きて、萩につけてやがてその使にやる

みよし野のかりの命はさだめねどおのが後こそたのむべきもの

風をあらみにはかにちりしふぢ袴香だにや多く殘らざるらん

今よりはいかにこ萩が花づまのをしかなき野にちりまどひなん

宮城野の露にしをるゝ秋萩は君がみかさのかけたのむなり

父のおもひにてありけるころ

浪の上をこぎ行く舟の跡もなき人を見ぬめのうらぞ悲しき

茂松庵といふ寺のもりの陰におくつきあり

しげりあふ松かげに君をおきしより風の音こそかなしかりけれ

ふるさとにまうで來て、又ほどなくあづまに歸ら
んとするを、母はらからめこは更なり、たれかれ別
をしみ泪おとすを見きくに、いはんかたなうかな
しくて

わかれをしむその人々の袖の露をあつめてしぼるわが涙かな

母君むなしくなり給ひぬときくに、なゝとせこな
た夢にのみ見ならひつるまゝに、うつゝとしもお
ぼえねど、しらするものは涙にぞありける、いかで
今しばしすぎば、こゝにもかしこにもゆきかひて、
ともに住みてんとのみ、老のたのみをかけわたり

しを、かひなくかなしき世にもありけるかな、今は
いかにせん
かりがねのよりあふことをたのみしも空しかりけりみ吉野の里
今はとも人を見はてぬくやしさは我身のつひの世にもわすれじ
妻の身まかりけるに
我のちをたのみし人はさきだちてふりにける身をいかにしてまし
あるゆふべ
色かはる萩の下葉をながめつゝ獨ある身となりにけるかも
夜をふかして
から衣たちぬふ人もあらなくに秋は夜寒になりまさりけり
こゝかしこありきつゝ家にかへりて
妹が門いでいるごとにはや行きてはやかへりことひし人はも
八月十五夜には尾花などかめにさして月めでつ

るを、さるわざもなし
先だちし人のたもとか花ずすき今はそれだに見えずなりにき
横瀬侍從のめぎみの身まかり給ひしをりによみ
てまゐらせける
をしか鳴くをかべの萩にうらぶれていにけん人をいつとかまたん
かぎりありてふかくはそめぬあらたへの袂の露やちゞにおくらん
ある人の十七年の忌に、かのよみたる歌を句の上
に分ち置きて、三十一人に歌もとめけるに、てをか
みにてかなしみのこゝろしらひして遠擣衣とい
ふ事よめとあるに
照る月にころもうつなる里遠み天がけるらんこゑかとぞ聞く
ある人の妻うせて後題を分ちてかなしみの歌こ
ひけるに九月盡を

秋くれて野風たつなり白露の玉のありかもあすやたどらん

ある人のいたみに、夕落葉を人にかはりて

何となく人のこゝろも。みだるゝはもろき木の葉の終のゆふ風

望月三英の父草庵が一周忌に、題をわかちて歌も

とめけるに、われもいとしたしき友なりければ、寒

草霜といふ事をよめとあるに

かぎりあれば終に枯野のおきな草いたゞく霜の末ぞかなしき

神無月の比井上河内守の母君みまかりたまへり、

守はみちのくの岩城におはすほどなり、たよりあ

ればみけしきとむらひまゐらすついでに、檜わり

ご一かさねついがさねにおきて、内に一つには五

菓一つにはつばいもちひ入れてつかはしける、そ

れが中に松子は韓のなれば、わりごのふたのうら

に、ちひさき紙に書きおしたる歌

常ならぬ嵐をいたみうつせみのからの木の實も散りにけるかな

河津長夫はすめら御國の書の學びをわがみちび

きつるに、もとよりからの書をもよくよみつれば

いと才ことにして、いにしへにかへるこゝろざし

ふかゝりつるを、わづらひて十月十七日に身まか

りぬといひおこせたるを聞くにいとくちをし、そ

の後とむらひいひつかはすついでに、美樹がもと

へ

わが道もさそはん人をぬば玉のよみにおくりてまどふころかな

となん、又長夫が今はの時、「ますらをはむなしく

なりてちゝ母のなげきをのみや世にのこさまし」

といひて、またわれはこゝろざしとげざるを、つぎ

て名をもあらはしてよなど、美樹にいひおきしと
ぞ、此歌は憶良の大夫の、「ますらをやむなしかる
べきよろづ世にかたりつぐべき名はたゝずして」
といふをおもへるなるべし、いとあはれにこそ、ま
た菊の花をおくるとて

白菊は冬だにかくてあるものをまだき消えにし露のかなしさ

ほかながらほかならずしも悲しきにうちのうちこそ思ひやらるれ

賀茂翁家集　巻之二

雜歌

嵐

しなのなるすがのあら野をとぶ鷲のつばさもたわにふく嵐かな

山

下野や神のしづめしふたら山ふたゝびとだに御世はうごかじ

瀧

あめなるやおとたなばたのおるはたの手玉みだるゝ山の瀧つ瀬

杣

陰高き高根の檜原そまたてとるや雲居の宮木なるらん

道

いにしへの奈良の御世よりふみわけし木曾の坂路のなれずもあるかも（かけそめしきそのかけぢのあれずもあるかなィ）

磯

百くまのあらきはこね路越え來ればこよろぎの磯に浪のよる見ゆ

船

おきつかぜ吹きにけらしなむさしの海みともせきまでいづ手舟よる（大江の水門にィ）

釣舟

大魚つるさがみの海の夕なぎにみだれていづる海士小舟かも

琴

あふさかやあづまてふ名のつまごとは清水にこゑの通ふなりけり

笛

うら安のくにぶりしるく萬代にくだてふふえは音をたえにけり

鼓

うた舞のいつゝのふしもつゞみてふものの音なくばうちもわかれじ

歌

そのかみはいつぬき河としらねども流れて絶えぬ歌にぞありける（歌は絶えずぞありけるィ）

書

見わたせばしもつ千里イ此世のくまもなし古りぬる書や高ねなるらん

倭文

いにしへのしづはた衣きし世こそおりたちてのみ忍ばれにけれ

まことが家に布引の瀧のいはほのくだけをすゑ

おきたるを見て

布引の瀧のたぎつ瀬おとに聞く山の岩ほを今日見つるかも

磯巖といふことを

沖つ舟手向すらしも岩波のたてるありそにかゝるしらゆふ

四月枝直が家にて韓使といふことを（これは五月韓人の來べき御世にはめづらかなればなん）（かく東まで來たる事なきに近き御世にはにて此題をいだしつ昔は）

東路(あづまぢ)のふじの高ねの高しらす君が世あふぐみつのから人

御嶽まうでせるこゝろを

世の中になにをむさぼることもなし金のみたけの神ぞしるらん

よのなかはと有るにもかゝるにもなづまずばな

にか經がたからんなどいひあへりけるときよめる

かた山のやまべうつゆふうらせばく誰かこの世を行きそむくらん

題しらず

眞柴たくはしばの里のうす瓦おもひくだくる世にもこそありけれ

伊久米の君へあかき木のみを奉るにつけて

千はやぶるあけの玉がきそをだにも越えてぞとりし君がみために

山本のをぢはあが母のすみける岡部の宿の前わたりするごとに、かならずとひたうびたる人なり、

今はかくて海山をへだててあれど、いかでかわすれん、さるをいにし年其國わたりすぎつれど、いそぐことありてえ訪はざりしこそ口をしけれ、今はかたみにしらぬ翁となりにてあるらめど、心をしるべとして今一度むかしのことあひ聞えむとて、

猶思ひわたる

雲のゐるとほつあふみのあはゝやま故郷(ふるさと)人(びと)にあはでやまめや

飛彈人といふ事を

墨繩のまさしきすぢをつたへなばあらぬたくみをなすなひだ人

こくすゐ(曲水宴)のえにのかたを(みゝ)

いはばしる水の玉うきよどをなみ心おそさの見えにけるかな

枝直の家にて紙繪の屏風に雪のふりたるに人々舟にのりて見るかたかけるを

白雲の中にながるゝ天の河うききにのれるけふにやはあらぬ

魚彦がもとにつどひてその所の歌とてよめる

かとりがた千重の潮瀬をせきあげて浪穂にたてる神のみとかも

紅子が久しうわづらひたるを、おやのかなしうおもひて、宮づかへはかたへの人くるしければとて、御いとまをしひて申し請ひてげれば、御氣色あしうて御いとまたびつるを、ひとりなげきて秋のころ、「やつれゆくたもとの露のうへまでもおもふくまなき月はとひけり」といへるをきゝて

行きめぐりなぐさむ時もあるものをおもひぐまなく月な眺めそ

岩水寺　此寺の洞につらゝ石といふあり

岩水のしづくの洞のつらゝ石いくつら〳〵の世をか經ぬらん

屋代山

四方もみなかべたちのぼるやしろ山大國玉やつくりましけん

鹽屋烟遠

鹽やだにまれなる浦のよそめには烟のすゑもさびしかりけり

海眺望

はりまがたせ迫門との入日の末晴れて空よりかへる沖のつりぶね

山館雨

しがらきの外山のよるの雨のおとを都の人にきかせてしがな

田家鳥

なるこ引く門田の稻のほどもなくたちてはかへるむら雀かな

松平備後守の秋葉社に奉るとてすゝめらるゝに

社頭杉といふことを

いく代經ぬいのるしるしもいちはやき國つ社にたてる神杉

古寺鐘

よしの山入りにし人は音せねど夕のかねにありかをぞ知る
よそに聞きておもひ入るこそあはれなれみ山の寺の夕暮の鐘

釋教

ながれ來てあづまにふかき法の水この行末はいづちなるらん

述懷

たま〳〵に人とある世をうき時はそむかまほしく思ふはかなさ

獨述懷

おもふ友あらばうれしき身ならましありのすさみはある世ながらに

寄風無常

花もみぢさそふ色香を惜しむまに身の春秋も終の夕かぜ

神山元廣が年ごろ吹きたりしひちりきのしたのいと多かるを、牛が島の長命寺のうちにうづみて、その上にしるしの石たてて、人々に歌よませけゝ

によめる、其石は大なる椎のもとにたてりけり
岩がねの椎が下かぜ吹き傳へいくよろづ世かおとにきこえん

稻垣求己齋冬の歌ども書きて筆くはへてよとて

おこせたるを、物のうへにおきつるに、よさり雨のもりてしみづきたりければ、たはむれによみてかたへに書きつけてかへしける

もる山のしづえをのみとおもひしに人のことばも雨はそめけり

茂樹が天の橋立を見て、松の枝を折りてもてかへりつる、それが歌よめといひければ

わたつみの浪もてゆへるはし立の松をかざしに手をりつるかな

十二月のはじめつかた傳通院の室にまうでたるに、あけんとしは增上寺へうつりて大僧正と聞えんまうけうち〳〵ありときゝて

朝日影にほへる山にむらさきの雲立つなるぞ立ちわたる春ちかみかも

枝直の二郎のうまれてはじめて神まうでせさせけるによみける

とこ世もの世にかをるべき種なれば梅の宮ゐの神ぞ知るらん

やんごとなき御まへにまうす

みたみわれいけるかひありて刺竹の君がみことをけふきけるかも

寶暦四年霜月、殿の四十の御賀の宴に侍りけるに、夜ふけていらせ給ふをり、御ぞぬがせ給ひて、眞淵にとてたまはせるは、いと多かる人々の中にていとおもだたしく侍るもおもほえずかたじけなきに、ことといみをしもえしあへぬまゝに

あふひてふあやのみぞをも氏人のかづかんものと神やしりけむ

おのが遠つおやは山城の賀茂よりいでて、文永の頃には遠江の岡部の郷をたまはれる綸旨などもありけり、その後ふたらの宮の大神濱松にましゝころ、御軍にいそしとておほん太刀をしもたまはせしを、其後はさるさまのこともあらざりしに、おのれおほえず御紋の御衣をたまはれるかたじけなさいはんかたなし。

羈旅歌

ふるさとにあからさまにかへらんとするを、終にはいかにさだめんとするぞといふ人に

ふる郷にとまりもはてず天雲のゆきかひてのみ世をばへぬべし

ふるさとへかへらんとする時、人にわかるとて

わかれ行きて又初雁とともに來むめづらしと思ふ人もありやと

よの子が信濃路をへて紀のくにへゆくに、立ちに

し後おもひやりてよめる

けふもかも分け行くらしも大きそやをきその山の峯のしら雲

紅のひきもの神もまもらなん旅ゆきしらぬ君がゆくへを

なにはへゆく人をおくる

百づたふ五十のうまやになる鈴のおとづれをだにたえずせよ君

旅行く人をおくりて

よく行きてよくかへり來てたちねのかはらぬみまへはや拜みませ

紀量が豊後の國にかへるを、ぬさしろとおぼしく

ていろ〳〵に染めたる紙をおくる、つゝみし紙に

書きつけける

たちちねのいはひてまたん木綿の山こえん日までの手向にはせよ

ある人七月七日にまで來て、こたび難波にいきて

來む年の秋なんかへり來ぬべきといふに

たなばたにいかにならへる君なれば久しき程をまてといふらん

大神垣守が土佐の國にかへるにわかるとて

むさし野の夏野のしげくおもふ事いふべき人にけふやわかれむ

信益が美濃へかへらんとする別に（信益は松平能登守の家臣にて美濃の國岩村の城をまもれり）

天飛ぶやつるの郡をいく千世のゆきかひぢとか君ならすらん

旅歌とて

あしがらの關の山ぢを北ゆけば空もをぐらきこゝちこそすれ

羇中關

みやこべのたよりなりけり白川の關行くほどの秋のはつかぜ

羇中海

はりまがたいかで都のつとにせんゐじまの波よかくよしもがな

羇中時雨

都いでて露をいかにとおもひしに時雨ふるなりみやぎ野のはら

物名

しもつふさ

神代より弓矢は手にぞならしもつふさはしからぬ人やなからん

茂樹が家にて歌よみけるに　あらぞめを

えぞの海やちしまのあらそめを多みあらはれぬべきわが思かな

賀歌

いでゐをいにしへざまにつくりけるに、九月二十六日人々つどひてほぎ歌よみけるによめる　寶曆五年の秋なり

飛彈たくみほめてつくれる眞木柱たてし心はうごかざらまし

これはけふつどへるはわが古の書の學びの道つたふる人々なればかくいへり

十一月十九日殿の大ひめ君へみちのくの守どのよりむすびの物まゐらせらるゝに、おのれも御ふみ御手ならひの事つかうまつれば、大かたなるべからねば、洲濱たてまつれり、そのさまかきの貝ながらなるを島にて、つくれる松をたてて、笹など本にあり、又鏡二つをねのかたにして、そのかゞみにしろいものして鶴のならびてとぶかたをかけり、

歌もちひさくて波のかたにかきつ、其歌

大ぞらにはねをならべて飛ぶつるの千年の影はけふよりぞ見む

とぞ、いと興ぜさせ給ひて、こがねなどたうびつ

長門どののおほば芳林院尼君の七十の賀に、養壽尼が檜破子調じて、ふたとみに鶴と龜とを數おほく書きたるをまゐるに、歌よめと殿のおまへのおほせごとありければ

天つちに千とせのためしおほかるは君いはふけふのしるしなるらん

とて青きうすやうをいとちひさく切りて、松のつくり枝につけてそへたり、此わりごなどは、殿のおまへにきこしめして、てうぜさせて養壽にたまへるをおくりたり、またわりごに松の實いるべきにて

君が身にこもれる千世はあるものを松のみとしも思ひけるかな

よし田の家の母とじの賀に秋の祝といふことを

よめとあるに

ことぶきをよし田の里にかる稻のちゞの年ある人ぞたのしき

おなじ賀をみほ子のするに、すはま杖などてうじてよといひおこせつれば、てうじてつかはしける、

其杖の歌もとむれば、ふるき例によりて靈壽杖をつくれる、其袋にぬひつけたる歌

玉ちはふいのちありてふ此杖は君こそつかめよろづ代までに

杖の長さ三尺六寸五分、よこのはしともとを銀(しろかね)してさいはひびしにつくりてはる、同じ菱(ひし)の紋をゑりつけたり、又鳩はよこの上のかたへにつく、かしら背尾などうす青に黄をまじへ、むね鳩の色な

り、採桑老の樂の杖のさまにならへり、むかしのさまなればなり、中ごろの世よりは、古今集に白がねにて竹の杖をつくりたるよしあるにのみよりて、竹の形に銀にて同じ葉をつくり、又鳩をばよこ木のかはりにやがてそれをにぎりてつくやうにつくるめれど、古今集なるはめづらしく歌にもかなへんとて〳〵わざにして、させるのりあるにはあらざなり、賀には靈壽杖こそからにもやまとにもあとある事なれ、又袋の形も今の世にすなるはいかにぞや、寶劍の袋のかたこそかゝるもののふくろの古きかたなれ、さればそれにならへり、すはまは菊小松さゝなどを作れり、あかゞねの板を鏡にとがせて、下水のながれをなせり、花の影おもしろく

見ゆ、足はさぎあしにて、あしゆひの紅の組あげまきゆひてたれたり、臺はごふんみがき、上によきすなごかんする石などをおきつ

松平備後守の七十の賀に菊によせてほぎ歌よめ

とあるに、かづけわたにそへてまゐらす

萬代を君ともなふときくなれば花のまゆしもひらく秋かな

あるやんごとなきわたりの賀に、菊をもてよめと

あるに

むさし野の一本菊を生(おほ)したててかぎりなき秋の露をまて君

松平遠江守の六十の賀に、鶴千年友といふことを

（此ぬし津のくに尼崎の城をしれり）

この殿になにはのことの千世はあれど契(ちぎり)しるきはなるゝあしたづ

意成院權僧正おこなひのしるかれば、今年おほや

けより御寺つくらしめ給ふ、僧正七十にしもおは
するを、さぶらふ人のことほがひするに歌よめと
すゝむれば
とぶさたていはひてつくる此寺の佛のよはひ君もへぬべし
奥山のよ川の杉にしるし得て世をいのる君は千世もへぬべし
くすし津輕季詮が父の五十の賀に
龜山のいく薬ある宿にしもいはふよはひぞかぎり知られぬ
ある人の賀に松延齢友といふことを
世の中の友にはあゆるならひあれば松をしたしむ齢しるしも
みちのくになる人の五十の賀に松延齢友といふ
ことを人にかはりて
ちぎりては籬が島の松が枝もおもひへだてぬ千世をこそへめ
ある女の五十の賀に春祝といふことを

十かへりをまつほど遠くわかえつゝいくらの春か花かづらせん
源の敏樹が母の七十の齢を芝といふ所の海のつ
らの家にてことほぎすめるに歌よめとあれば
わたつみの常世の波をよるべにて祝ふよはひは數も知られず
遠江の山のおくなる浦川といふ所を廣くしめて
すまふ雛島まさちかといふ翁、今年七十なるを、我
も遠きゆかりあれば、ことぶきてよと遠々にいひ
おこせしかばよみておくる
まさか山おくやまつみをいはひつゝ榮えむ世々はかぎり知られず
人の賀に杖をおくるとて
やま人の桃のしもとの手つか杖君こそつかめもゝといふ世も
人の七十の賀に橘によせて
橘の陰に道ふみうらとへば千世ゆく末はまさしかりけり

しはすのはじめ秋田泰林の六十の齢をその子泰
因がいはふに、竹不改色といふ事よめとあれば
くれ竹の雪かきわけてちぎるには千世の色こそことに見えけれ
年さむきあらしにかれぬ宿の竹はいでそよ千世の友にぞありける
わが友を竹のともともいはひおきて風に雪にもかれじとぞ思ふ
こゝのそぢまり八なる人をいはふむしろに竹を
よめとあるに
くれ竹の世の長人のすまふなる千ひろある陰に我は來にけり
平春道が父の賀に竹によせてほぎ歌よめともと
めければ
人の子の千代もといはふまことには竹の心ぞさぞなびくらん
まき田永正はゝの六十の賀しけり歌よみてよと
あるに、さることなりむつましきちかどなりなれ

ば大かたにやはとて、竹の枝につけてつかはしけ
る
いはふなるこゝろへだてぬ中垣はこなたの竹の千世もゆづらん
ある人の七十の賀のむしろにて月前竹といふ事
を
よろづ世にすむべき庭の月なれば竹をうゑてやかげ宿すらん
義陳が母の六十の賀の屏風に、十二月竹おほきや
どに雪ふるかたを
わが宿の竹のは山にふる雪はしらねなればや消ゆる世もなき
武算が母の五十の賀の月次の屏風に、八月十五夜
のかたかけるところに
長きよの秋のなかばにいとゞしく暮るればいづる月ぞたのしき
また十二月松竹ある庭に雪ふれる所

松がえも竹もけぢめのさまゝ〳〵に千世をこめたる宿の雪かな

人の賀の屏風に、十二月松に雪つもれるかたを

雪つもるいつはの松のいつも〳〵かはらぬとしはくれぬともよし

永正がもとにて枝直周武など歌よみけるに、此ち

かきほどあるじの母の賀しける名殘にとて、猶祝

のこゝろをそへてみゆるものを題にて、はやく咲

きたる梅を瓶にさせるを

萬代の春まつやどの梅なればいとはやかめのうへに咲きけり

まきを

おく山のおく霜やたびかさぬとも眞木のみどりは千世にかはらじ

永世が六十の齡を其子千國がいはふ時よめる

みはかしを玉まき田ゐの五百しろに千五百の秋の初風ぞ吹く

とよくにの小笠原氏の家人の六十の賀に、歌ひと

つと白猪のぬしのせちにいふに、かゝること世に

多きを、うとき人のはかたくいなびのがるゝを、こ

の人のまれにもとむるにはいがゝはせんとてと

りあへず

豐國の鏡の山の松にかけて髪のみどりも千世にこそ見め

阿波守國滿おほやけにまうす事ありてわが家に

ある比、人々とひ來て歌よみけるに、寄神祝といふ

事を

君が世に神の惠の露そへて御謝山もとのうみぞたえせぬ

この國滿は遠江濱松の諏方社の大祝なり、さて信

濃の國なる此大神の社わたりに、月池星池あり、御

謝山のふもとなり、その池のほとりに天つ露日ご

とにふれば、此池の水たえずながれうるびてすは

の海に入る、その海のながれ遠江の天の中川にお
つとなんいふ
鶴千年友といふ事を人にかはりて
みしま江の玉江に千世をしめしよりあしべの鶴ぞ君が友なる
藤原常香のすゝめけるある女房の五十の賀に松
樹契久といふことを
たをやめの同じ操をちぎり來てへぬべき千世も松ぞしるらん
わかゆべき契かまつの花かづらいく千世かけてをとめさびせん
牧野駿河守のもとにて寄名所祝といふ事を（此守越後國長岡の城をしるゆるにこのところをいふ）
霞みつゝ彌彦山（いやひこやま）にふる雨のいやますゝにいへぞさかえむ
寶暦四年殿のよそぢの御賀の宴に侍りてよみて
奉りける

大君の守りとなれる君なれば君がよはひは神ぞまもらん
枝直が七十の賀の屏風に、三月櫻のもとに弓いる
かた
葛城の襲彦まゆみ引きつゝもますらをのともの花を見るかも

擬神樂催馬樂歌

寶暦のはじめつころにや、翁のかきつめられしも
のの中に、神樂さいばらになぞらへてつくられた
るあるを見いでたればこゝにのせぬ、おもふにこ
はやんごとなき殿のをかのかたちつくれる所に、
もがさのうれへをまもらひます神をいはひたま
へりし事ありて、その神のまつりせさせ給ふとき、

たはむれにつくりて奉られしにやとおぼゆ、その
ことわりもありつらんを、うせにしかばおしはか
りに書いつくるになん

玉籬をつげとてしもやむかしよりかみさびけらしをかのまつ
が枝　枝もしみゝに

むかしべのためしにならふみづ垣はつくる日よりぞ神さびに
ける　むかしおぼえて

すめぐにの上代のことはうらやすしならひてあれな安きため
しに　末の世までも

しめはふる岡のつかさの清ければいもひもやすしぬさもやす
けし　神のまに〳〵

きみが代のながづきこそはうれしけれ今日皇神(すめがみ)をまつりはじ
めて　たえじと思へば

よろづ代のながの月にさく菊のはなかみのみまへにかざしつる
かも　神あそびして　神のみまへに　一本下句かざしにしつゝあそぶなるかも

しら菊の花をかざしにさしつれば袖はかへせどちらじとぞお
もふ　秋てふごとに

御園生(このそのにゝ)にいはひてまきし山あゐを今日のたもとにすりあへに
けり　いろもしみゝに

うらやすのたやすの秋の初穂もてあなうらやすの今日のみに
へや　平らかにして

さいたまの里のとねらが造るゆふ神のみてぐらをゆひてける
かも　きよきしらゆふ

この岡の松の木のまゆ見わたせばうみもせきまでうくたから
かも　ともへならべて

しながどりあはにつぎたるすゑの山すゑもさやけしけふの日

影は

いり江どの大門の入洲のあしはらも君ししむればみやことな
りぬ　よろづ代までに

酒飲　イのやまかけつゝ

神のかうみきたべゑうてようべもすんがらまふよひぞとりは
なくともまふよびぞながなきどりやとこ世どり

同

あはれたふとさあなたふとけふのながに月にあふ人よ神のまつ
りにあふ人よとるみてぐらはたふときろ

老鼠

このをかの老ざか木わかざか木ちんよつんづとしつんづとし
つんづくうげにまうさんけにまうせくうげのおほためけのま
うけ

同

西じろのはつみとしえりみとしもはもつんづなもつんづなも
つんづおほにへまうさんみべまうせおほにへまうさんみべま
うせ

紀のくに

このしまはとこよのしまぞまどこよのしまによすがらあそぶ
はれなぞもといへや

二段

ふえしもふいたればみことしもあへたればとこよのとりのは
れその鳥となふ

同

むさしのやとしまのはたにまどしまのはたにいも引おきなは
れそのいもたばれ

二　段

ひくしもやすければまゐるこそやすけれいももる神もはれそ
のやすみあへ

同

いにしへゆめでてしもののみめづらしものとさかぶくをばな
はれそのかりみほを（御庇）

二　段

まくさしふいたればみたけ（竹）もてつくれば神こそめでめこのな
かじまは（中島）（黒木の代りに竹を柱とし尾花をふきたり）

とりものの歌　ほこ

八千矛の神のゆづりし大君の御代の守りのほこぞこのほこ

長　歌

殿の御賀に御杖たてまつる歌

かづらきや　ひと言（こと）ぬしの　神のます　もりのさか木を
うじもの（鵜）　うなね（頸）つき（突）ぬき（貫）　しづはた（倭文機）の　ぬさとりむけて（幣取向）
わが君の　御つゐにとりき　今日の日の　みほぎ（御賀）の庭の
にはすゞめ（庭雀）　うすゞまりゐて（蹲）　百ちゞの　ことも（言）なにせん（何爲言）
萬　代に　いませ吾君と　ひとことまをさも（一言申）　ひとことまをさも
よきことを一言ぬしの大神のさちはひまさなん杖たてまつる

奉賀新田家大夫人歌一首並短歌

上つけや　にひたの山は　いで（出）たちの　よろしき（宜）ま（眞）山
いりたち（入立）の　くはしきね（嶺）かも　いでたてば　君をも（守）る　山
いりたてば　家をも（守）る　山　このいへの　世々につたへて

幸さつ弓の　幸さちある山ぞ　ときはなす　よはひもがもと
母たちちねを　よろづ代までに　百づたふ　五いそぢの冬に
言ことほぎし　賀酒ほぎなして　いはゝせる　ことぞよろしき
今よりは　新田の　山の　新にひざち　幸いよゝかさねん
この家の　はゝのみことの　ちとせもる山

反歌

たらちねをとはにもる山しめおきていはふよはひはかぎりしられず

侍従貞隆朝臣の京に御使し給ふをおくる長歌短歌

みぬの山　おきその山は　靡なびかへと　箭つけど　不なびかず
かく依れと　蹈ふめどもよらず　よしゑやし　なびかずありとも
よしゑやし　よらずとふとも　かけまくも　いともかしこき

新あたら世を　ことほぎ祭まゐる　みことをし　持もちて行く君
率ひきゐます　八十ともの伴をの　駒こまのつめ　岩ねふみ蹈さくみ
鈴すゞがねは　山ゆき行とほし　平たひらけく　越やすけくこえん
おきそ山　みぬの山　大きそやをきその山の　岩がねもなびきよるべきたびにや
はあらぬ

右は寶暦十二年九月、皇女御位を嗣ぎませる御よろこびを、あづまよりまうしたまふに、横瀬侍従の此御使にさゝれて、信濃路よりのぼらるゝを、したしき人々に歌もとめらるればよみつ、京のことなどは人々皆つくせれば、かくのみいへり

詠松有榮色賀大木老人八十算歌一首竝短歌　老人善碁

松陰に　山人あそび　ときはなる　齢はしるし

御世の名の　ゆたにのぶてふ　新しき　はじめの年を
去年(こぞ)といひて　今年のはるは(しイ)　いづこにも　杖つきまゐり
あしびきの　山にもあそぶ　手(た)束(つか)杖(つえ)　斧の柄すらは
くちぬとも　くちせぬものと　松の花　さかんごも見む
このぬしは　山人のごと　山松のごと

反歌

山人の千世の始の春とてや松のみどりもことに見ゆらん

僧祐達綸旨まうしにみやこにのぼるをおくる(時は)

正月十一日なり　この日春たちぬ

東より　春こそたてれ　都べに　花こそさけれ
その春に　君さそはれて　その花の　みやこに行くや
おのづから　みのりの花の　開くべき　春なりけらし
春の日も　かぎりこそあれ　咲く花も　うつろふものを

ときはなす　御法の花の　すゑ〳〵も　たえぬかをりを
つゝみもて　霞の袖の　たちかへり　はやおほはなん
世の人のため

東より春にともなふ行へこそ法の花さくみやこなりけれ

大和のくにをおもひてよめる

神ろぎの　神の御代より　天つ嗣　日つぎしらしゝ
御孫(まの)尊(みこと)　吾大王(外とつ)の　直(内)(平)なほくたひらに　雄(外)をゝしく猛(たけ)く
うちらをば　みし給ひ　聞したまへば　栄(臣)
八十國も　いよゝ眞廣く　百のたみも　いやさかはえき
空みつ　やまとのくには　白雲の　とにたちわたり
山見れば　山いや高し　里みれば　さとたひらけし
春花の　うちぐはしくにぞ　こゝをしも　うべ敷きましき
八十くには　うべもさかえつ　いにしへの　そのいづみ代の

足たり御世を　いまもみるかも　日高みのくに
大民だから吾こゝろさへゆたけしも大和國原はるみてしより

よし野山の花を見てよめる

ことさへぐ　人のくにには　聞え來ず　吾みかどにも
たぐひなき　よしの高根の　さくら花　咲きのさかりは
馬なべて　とほくもみさけ　杖つきて　みねにものぼり
見る人の　かたりにすれば　きく人の　いひもつがひて
天雲の　むか伏すきはみ　谷ぐくの　さわたるかぎり
めでぬひと　こひぬ人しも　なかりけり　しかはあれども
世の中に　さかしらをすと　ほこらへる　翁がともは
八百萬　よろづの事ら　きゝしより　みるはおとるとイ
いひつらひ　ありなみするを　みね見れば　八重白雲か
谷みれば　大雪降ると　天地に　こゝろおどろき

よの中に　ことたえつゝ　ゆく牛の　おそき翁が
うつゆふの　さかりしこゝろ　くいもくいたる

もろこしの人に見せばやみよし野のよし野の山の山さくら花

夏日東海道中望富士山作歌一首竝短歌

磯間いそまより　背そがひに見ゆる　駿河の海　沖つなみぢは
せばきかも　ふりさけみれば　さがみねの　八重山みねは
ひくきかも　天の原なる　ふじのねの　ふもとをいでて
風のまに　横ほる雲に　するがの海　おきもかくろひ
さがみねの　みねも雨ふり　時のまに　神もなりゆけど
水無月の　照る日のそらに　あらはれて　くもるともなく
とこ夏に　雪ぞふりける　富士の高ねは

返歌

するがなる富士の高ねはいかづちの音する雲の上にこそ見れ

不士のねのふもとをいでて行く雲は足柄山の峯にかゝれり

橘永世が屋を高くつくりてその見ゆるさまをよ

みてよとこひけるに

東なる　とほのみかどに　百千里　いへはあれども
とりよろふ　山は見ゆれど　天の原　不盡の高ねを
やどながら　朝ゆふ見つゝ　百千足もゝちたる　心は知りぬ
とりよろふ　いへにもあるか　百千々の　時はゆけども
常夏に　めづらしきかも　ふじの白雪

みな月の末つころ高き屋にのぼりてよめる

おいが身は　人こそいとへ　ふる人は　世にこそすつれ
わたつみや　いとはざるらん　山つみは　すてやたまはぬ
見わたせば　波をきよらせ　ひもとけば　風をかよはし
世のひとの　いとふてふなる　夏の日の　てる日も知らず

高きやに　つどひてうたふ　ふる人のとも

浦人のたひつりかへる伊豆手ぶねはやく涼しき夏にもあるかな

七日の夜縣居の翁が戯歌

七月のなぬかのよらは　七とりの　つくゑをたて
七種なゝくさの　ものたてまつり　つくばねの　にひぐ桑はまゆの
初はつ引を　ちはり針ぬき垂たれ　あめ引　たなばた縒つめの
五百機はたて　その夫せの君が　七重かり　八重かるきぬを
織おりもあ堪へ　ぬひもあ堪へなも　おるわざに　あえてもがも
ぬふ手に　あえてもがもと　春日なる　高圓まの野べに
にほふちふ　七くさの花の　花かづら　今するこらの
愛みめづ兒の　しかぞ設まけする　みめづ兒の　かくぞこと言擧あげする
感うむ欣かしみ　われもおもひて　眞白なる　七つ束かひ髻げを

撫かきなでて　を琴をあそび　歌うたに吟よひ　童わらはそびすも
ぬばたまの　かぐろき髪の　垂をはなりに　遊なりてしもがも
自あえなもあえなも

權禰宜度會大夫二大御神の御池のぬなはに歌そへて遠くおくられたり、八月十五夜しみ來りければこたふ

高知や天の　み影　天あま知しる　や日の御影の
水に生ふる　尊ぬなはをくりて　ぬば玉の　よるの食國をすぐに
しきませる　月よみのみかげ　湛ふなる　八月の今夜
かき向むくる　ことのよろしさ　日のみかげ　月のみ影を
かくしつゝ　汝みましもわれも　吾ぬなはなす　長ながくあ仰ふがな
ながくあふがな

百ちひろ千ひろのぬなは結びあげて神の御池の心をぞ知る

獻三河國高次新墾之蕪時歌一首竝短歌

名ぐはしき　三河のくにの　に新ひば墾りの　にひ御世すらを
そこにしも　ひらきたまひし　大　君の　惠のひろに
大御名を　高すのはまの　にひじりに　つくるあをなは
ひさかたの　あめはさゆれど　あらかねの　つちはこほれど
いや生ひに　おひし茂みにけり　大　君の　おなじみす御風の
吾　君の　みけ御食につみ摘來て　冬ごもる　時にはしィあれど
御こゝろを　はるのみまけと　みさかえも　千世のわかなと
けふたてまる

反歌

天きらしみ雪ふれども三河なるしかすがにこそなは榮えけれ

岡部の家にてよめる　寶暦十三年の六月なり

とし月イ〳〵に　しぬ甚びまつれば　ふるさとに　いますがごとく
常はしも　おもひてしものを　なにしかも　無由もとなかへりて

あふ人に　ことゝひぬれば　ちゝの實の　父はいまさず
はゝそばの　母もいまさず　しかはあれど　吾妹なねの
かしらには　しらがみおひて　かな戸より　いづるを見れば
母とじは　いましにけりと　立はしり　よろぼへる
おもてには　しわかきたりて　いぶかしみ　われをしも見て
妹なねは　父來ましぬと　しら玉の　おもひたりけり
かたみに　ことをもとはず　なみだかきたり
むかひゐて　むかしべしぬぶ　ことぞさねおほき

倭文子をかなしめる歌

ちゝのみの　父にもあらず　はゝそばの　母ならなくに
なく子なす　われをしたひて　いつくしみ　おもひつる兒は
初秋の　露に　匂へる　眞萩原　ころもするとや
まねくなる　尾花とふとや　鹿子じもの　ひとりいでたち
うらぶれて　野べにいにきと　聞きしより　日にけにまてど
うつたへに　こともきこえず　ちゝならぬ　われとやとはぬ
はゝならぬ　身とてやうとき　こひしきものを
初風の　吹きうらがへす　秋の野の　葛のうら葉の
うらぶれて　いにしその子は　はぎ見ると　行きやはしつる
霧わくと　まどひやはせし　うつし身は　かなしきかもよ
かへりこぬ　道に過ぎぬと　家人の　告げつるものを
おいらくは　おほしきことを　ひたぶるに　おもふがまゝに
わするべき　わざならぬをも　たつきりの　まどひけらしな
まどひつゝ　あらばあらまし　なにすとか　まさかをしりて
さらくに　にひものごとも　なげきしぬらむ

萩が花見ればかなしないにし人かへらぬ野べに匂ふと思へば

あらきするにひもの秋はたつ霧の思ひまどひて過しだにせじ

小野古道が妻の身まかりてあくるとしの秋、かな

しみの歌よめとこひけるによめる

うつしみの　ことをもとはず　うらぶれて　いにしなにもが
さねどこは　こともなありそ　たゞみはも　ゆめよあやまち
なくもがと　いはひまもらひ　天行かば　天路やすけく
下行かば　下べことなく　八十の隈　もゝのくまぢを
いゆきへて　かへらむものと　春べまち　夏をもすごし
もみぢばの　過ぎにし秋の　立かへる　ときになりぬと
眞袖もて　ちりうちはらひ　そむきぬる　枕とれども
朝床に　妹は起きゐず　ゆふ庭に　妻は來まさず
いにしより　かへらぬ道を　今しはも　おもひ知りつゝ
こいまろび　ひづちなくらん　君がかなしさ

夜をさむみつゞりさせてふ蟋蟀すいたづらに鳴く秋にもあるかな

詠筥根山歌四首竝短歌

あしがりの　はこねの山は　大名持　その大神の
やさかにを　をさめたまふと　やまとなす　少彦名の
御神やも　つくりたまひし　ちはやぶる　かみのみさかの
しらくもを　わけてのぼれば　くものへに　ひでたるねこと
玉くしげ　はこがたなせれ　立ならぶ　ふたつのみねは
ふたとすら　かけごとすらも　とりよろひ　開きしたちなみ
よろづ代に　名にしおひくる　はこね山　ふたごの山ぞ
神さびにける

反歌

久かたの天つ御寶をさむとかはこねの山はつくりけりしも

○

神さぶる　はこねの山は　わたる日の　天をやへだつ

あらかねの　つちをかわかつ　手向する　みさか(御坂)の上に
のぼりたち　にし(西)にむかへば　あづまを見れば　ゆふ(夕影)ふけしも　朝(影)けのごとく
鳥がなく　朝けすら　夕けとぞもふ
ゆふべなす　雲霧がくり(隱)　はか(不測)りなき　ちひろ(千)の谷に
くだりたち　かへり見すれば　ふるさとは　空だにみえず
大君の　ふとしきませる　くぬち(國内)とも　おもひわすれて
あし引の　山のしづくに　そほちつゝ　東にくだる
みやこがた人

反歌

やほによしたひらの宮のあたら代に開きし道のなれずもあるかも

○

東路(あづま)の　はこねの山の　やまのへ(上)に　たゝふ(湛)る海は
くろき海に　白き波たち　青雲の　ゐる空ちかみ

月讀の　水かたゝふる　天の河　ながれかかよふ
久かたの　あめ尾羽張の　みことかも　せき(塞)たゝへけん
神代より　かれ(不)せぬ(渇)海に　わたつみの　宮べにありとふ
ゆつ(五百桂)かつら　それならなくに　ちひろ杉　生たちながら
みなそこに　うづ(埋)もれにつゝ　八百世にも　千世にもうせず
くちもせず　今のを(現)づつに　見るがあやしさ

○

鳥が鳴く　東の國の　道のはてに　なみた(並立)つ山は
とつく(外國)にの　國のさかひと　みすゞかる　しなのゆかひゆ
とほ長く　伊豆のさき(岬)まで　なみたてる　百の高ねは
をすぐ(食國)にの　中のへだてと　八千矛(緯)の　神のみことの
つくらし(造)ゝ　山にぞありける　日のよこの　これの百山
日のたて(經)に　ゆきかふ人の　おほけれど　岩きりとほし

あしがらの　秋なの山に　道を(墾)はり　關をもすゑて
君が代を　まもらひこしを　するがなる　ふじの高ねの
かぐつちの　神のみごころ　あらびたる　ことしありければ
八百によし　たひらの宮の　あたら世の　始の時ゆ
玉くしげ　開きそめつる　はこねぢの　みちのをちこち
ちはやぶる　人をなごすと(和)　いやひろに　くにををさむと
むさし野の　野のへさきまで(上狹)　我　君の　ふとしきませば
都　人　ひなびとさはに(多)　ゆきかひて　しもとおしなみ(楚押靡)
いはむら(群岩)を　ふみならしつゝ　時となく　雨はふりつゝ
ときじく(非時)に　雪のふるとふ　あら山も　やすくしこゆる
とほの都路

反歌

君が代のまもりなれとて神の世にはこねの山はつくりけらしも(としイ)

詠蝦夷島歌四首竝短歌

やすみしゝ　我　大　君　の　神のまに　しきますくにの
鳥がなく　あづまのくにの　みちのくに　すめるえみし(蝦夷)は
むかしへの　ふみにしるして　みくさある　それがなかにも
にぎたへの　にきえぞとふは　いで(出)はなる　あいた(秋田)をぐに(小國)に
すまひつゝ　まつろひたる(服從)ぞ　ふ　ぢ　衣　あらえぞとふは
ぬしろ(沼代)より　やゝ道さかり(離)　うとかりし　えぞなりけらし
とほえぞと　いふはるけき　都(つが)賀留ちふ　をぐににありて
しらじもの　木のねにふせり(臥)　つち蜘(ぐも)の　穴あなにも居つゝ
ちはやぶる　ことをしなせば　そこばく(許多)の　御軍(みいくさ)たゝし
こゝばく(許多)の　もりべ(守部)をおかし(置)　多賀の城(き)や　かみの城(き)こえて
あらえぞが　ひらぼこ山に　御　軍　は　いばみたけべど(満雄誥)
遠えぞの　かぎりをしらに　みちをはり　岩ねさぐくみ

ものゝふの　ちゞのたけを（猛夫）の　駒のつめ　つがるをぐにに
せまれゝば（逼）　まつろはましを　心（鈍）おぞき　えみしがとも（輩）は
うなのへの（海上）　はなれ（離）小島に　舟のまに　こぎかくれ（漕隱）し
そこもへば　むかしへえぞと　聞えしは　つがるぞとほき
きはみにて（極）　今いふえぞは　その世には　むなし（空）島にも
ありやしつらむ

○

すめらぎの　神のみくには　船かぢの　いかよふかぎり
こまのつめ　つがるのうらの　えびすめの　ひろめ（昆布）のなびく
いやひろに　百年あまり　うちなびき　大政（大政）おほまつりごと
あづまにて　まをしたまへば　なみのむた（波共）　よらぬものなみ（無）
そのえぞが　今すむしまも　ひろめなす（如）　廣しといへど
雲のゐる　山のみ高く　浪の振る　いそこそあらく

ありければ　つがるにむかふ　わたのそこ（海底）　いくりにおふる
松前の　浦かたつきて　かきかぞふ　いつゝのたね（五穀）を
おほす（令生）べき　つち（地）のかぎりは　つかさまけ（司設）　もりべ（守部）おかせば
えみしはし　おのがさち（幸）なる　けものとり　魚とりを（食）して
このしまの　北にさかれる（離）　まかちぐに（蕀鞨國）　そがあはひ（間）なる
ことさやぐ　からふとじまに　けものもち　魚もて行けば
わたど（海隣）なる　まかちの人は　青玉も　きぬももて來て
あひかへて　かよふとすれど　まかち人　えぞへしもこず
えぞ人も　まかちはゆかず　あるこそは　よろしかりけれ
しかれども　まかちの人も　えみしらが　なつくをみては
かくばかり　かしこきくにと　日の本の　やまとのくにを
あふがざらめや

この長歌四首なるが、末の二首は、寫しあやまり多

く、詞のおちたる所もありて、よみがたければのぞけり、重ねて善本を得たらん時に、補ひ載すべし

反歌

駒のつめつがるのをちのえぞがしまそをさへなつく君がのりかも

津輕舟北ふく風にこゝろせよえぞが浦和はなみたゝずとも

いざ子どもこゝろあらなんみちのくの千島のえぞもやさしとぞきく

うま酒の歌

美飲喫哉

うまらにをやらふるかねや　ひとつきふたつき　樂悦

掌底拍舉言直心

たなそこうちあぐるかねや　みつきよつき　ことなほしこゝ

直五杯六杯三杯四杯天足國足

ろなほしもよ　いつつきむつき　あまたらしくにたらすもよ

七杯八杯

なゝつきやつき

旋頭歌

この冬はいとさむからねば梅のとくさきてはやく散るもあり、後の十二月十五日に春の立ちけるを、廿一日の朝雪いとふかくふりたりければ、

梅のはな　ちりしく庭に　雪はふりにけり

春の來て　消えなんのちも　きえずやあらまし

賀茂翁家集　巻之二（歌之部）終

四方の海浪をさまり、なゝつの道往かひやすらなる、みよのいつくしみをかうぶりて、文のをしへいたらぬくまもなくなりにたれば、大みくにぶりに心をよせぬ人やはある。それが中にも、小澤のおきな蘆庵といへるなん、わかきより此道にふかく入りたち、おいにいたるまで詠める歌の、いともおほかめるを、かいつめたる巻々も、おほかたの人には見せずして、はこのうちにひめおけるを、おのれこのまなびするとて、たいめせしついでに、としごろのしふをと、せちにもとめしに、翁いへらく、なべてはいとあまたにて、いたづらなめれば、みつがひとつばかりかゝせて見せまゐらせなんとて、此六帖の詠草を贈られき。さるをこたび梓に刊せて、おなじ流くむともがらの、筆の勞たすけてよといふ人のあなるにまかせ、校し合することを、小川布淑前波默軒などにあとらへて、板にはつけさせぬ。もとよりまたき物にしあらねば、もれたるにもよかなるが猶あべけれど、わが見ぬをばさておければ、つぎておぎなふ人もありなん。おのれものゝふの道を、もはらにすめる家にうまれて、かうやうのみやびわざにたづさはる

も、をさまるみよのたまものとおもはざらめや、いはざらめやと、平ののぶ憑筆をとりてかくしるすは、文化とあらたまれるとしのかみな月にてぞありける。

六帖詠草　春

春歌

ふるとしに春たつ日梅を見て
年のうちにはるきぬめりと梅やさくうめさけりとて春やきぬらん

かすみを
年のうちに日かずをこめてあら玉の春の霞はたな引にけり

年内立春
かぞふればとしの日數はつきなくに花まちつべき春は來にけり

さらでだにとまらぬ年を急がせて殘るひかずも春になしつる

うるふ月ありけるしはすのなかばに春の立ちけるを

此月のそはずはむつき常よりもおくれてきぬる春ぞといはまし

ついたちのあした手あらふとてよめる

てにむすぶ水もぬるめりいづくにもけさは春風氷とくらん

とし明けなんとする曉からすの鳴きたれば

くる春をまつのとぼその明くれにとほ山がらす一聲のそら

試筆とてよめる年々の歌の中に

けさよりはよし野の山の春霞たが心にもかゝりそむらん

人ならばなしといはましを蓬生のけがしき宿に春はきにけり

今ぞ知る老もわかゆといふなるは春たつけふのこゝろなりけり

岩戸いでし光もかくやあら玉の春にあけゆくしのゝめの空

除夜に雪ふりてのついたちのあした

ふりにけるよのまの雪はあら玉のとし立かへるけさのはつはな

岡崎のいほりにすみて三年といふ春にあひて

明けそむる野山のけしきうら〳〵とこゝに三度の春をむかへつ

ふるとしより鶯のなくをついたちにもきゝて

ふるとしにきゝし鶯それながらあらたまりぬる初春の聲

としあくるあした雨ふりていとのどかなりける

に

いとはやもふるとし遠き心ちして雨にかすめるけさの初春

岡崎の近きわたりなる寺々へ百首歌奉らんとて

人にもよまする時善正寺に奉る立春のうた

けさははや春立ちくらしかぐら岡松風ゆるく霞わたれり

おなじ題を滿願寺へ奉るには

から衣うらめづらしくたつ春をいのりかさぬる法のこゝろ〳〵

元日立春

あら玉のとしとのみこそおもひしかおくれずたてる春霞かな

立春

朝日さすみねのまさかき霞むなり春立ちくらし天のかく山
とし立かへる

いにし春見しものぞともおぼえぬは年立かへる霞なりけり
春從東來

此國も猶ひがしよりくる春をもろこし人はまつや久しき
雪消氷亦釋

けさははや外山の雪ま見えそめてかけひのなるひ雫おつなり
太秦にすめる時とし明くる曉のかねにつゞきて

つゞみうち讀經の聲きこゆ
しらみゆくおまへのほかげ法のこゑ心すみぬるけさの初春

高き梢に朝日のうつるを見て
朝日さす梢のみゆき解けそめて春まちえたる蜂岡の松

春生人意中

春きぬとおもふ心にみよし野の山のかすみはおくれてぞ立つ
待つけし人の心の春はまた花鶯も知らずぞあらまし

春到氷解

山陰もこほりとくらしなつみ河川おとゆるき水のはる風

初春雨のいとのどかなる日

おい木さへめぐみにもれぬ春雨のふる野の若菜いかにおふらん

澄月法師より七十あまりみつのあじたのことほぎとて「春たてばまづものまうす我よりもその
そこいかに長閑かるらむ」と聞えしかへしに

春さればまづ咲く花もいたどきの雪にまがひてのどけくもなし

又あるとしのむつき六日といふに此老僧よりせうそこして「うらゝなる春に越えけり君も我も

老の盛の花か柳か」「消えのこる雪よりゆきのは
じめまであらばや又もふることは見ん」「又や見
んことしはいたくとばかりの老もわするゝ春の
ことの葉」これのかへし

君も我もおいの盛にほこりなん柳さくらはもとよりの春
もろともにけぬべき春にありふるもさだめなきよは雪も又見ん
やそぢあまりみとせの春をまちつけし初ことのはの花を見しかな

鳥がなくあづまの空のしらむより神代もかくや
と天地のけしきもやはらぎ松ふく風もことの外
にのどかにて千代よばふ心ちのせらるれば霜雪
のふりとふりにし老もさらにわかなうぐひすと
見きくものごとにこぞのさまはみなあら玉のは
るめきたりされど隙のこまはとゞまらずあけく

れてあかきかゆくふ日になりて雪いとしろうふ
れるになけどもいまだとぞつぶやかるとしごと
にけふはしたしきかぎりつどひ梅をかざしうた
けしうちあけあそぶ日なりさればおもへること
をのこさでかたみにいひて心をやるとてあろじ
のおきなあやしき聲してまづうたふになゝそぢ
あまりなゝとせのはつはるのまどゐといふを句
のはじめにおけるそが中に

ながらへて見るかひあるは梓弓はるたつ山の霞なりけり
まつ高き風のしらべにのこりける千年のあとの古きよの聲
りう俗の色かならぬを梅の花など塵の世に咲きはそめけん
のきちかく咲きぬる梅のこのまより遠山はたにわかなつむ見ゆ
はつ〳〵のわかなやもゆとあさるらん人め見えそむる霜のふる畑

初夜過るころ人々かへりたるに山野を見れば雲
晴れて月さやかなるにねられねば布淑はいづく
わたりまでかゆきつらんなどおもひやりて
あともなきすざく大路のふるきよを思ひいでつゝ雪や分くらん
今はかつらにこそいなめとおもふに銀橋を月に
わたせるけしきならんかしと思ひて
雪つもるよるのかつらの河はしは月にわたせるみちかとぞ見む
亥のときも過ぎ侍りければ
かつら人いまかかへらんかるもかきふするの時もはや過ぎにけり
日のかげすこし暖かなるあしたいほのとに出で
たるにしらがの風になびくを雪かと見まがひて
春の日に雪かもちると見えつるはきえぬしらがの光なりけり
よも山のゆきはむら消えたるにひらの高ねは白

かねをのべたらんやうに春日にかゞやくを見て
はるゝ日は雲るに見えて白雪の高ねまがばぬひらの遠山
春日
何となくのどけきものは初はるのみどりの空ににほふ日の影
初春祝道
ゆくすゑのどかに見えて天のみちも正しきみよに春はきにけり
法眼純方より宮の御當座十首の卷頭とて初春霞
をやがて詠進すべきよしいひ來れば則ちよみて
奉る
淺みどり霞にもるゝ色もなし春立くらしよものやまゝ
初春雪
霞あへず猶ふる雪もけふよりの人の心の春はうづまず
早春梅

冬かけて吹きそめしかどうめの花春の色香はことにぞありける

春日望山といふことを甲斐權守季鷹がよませし

に

春くればいづくの山もひとへ山かさなる嶺もわかずかすみて

子日の心を

春日野にいざといはましを山陰のけふの子日はまつ人もこず

はつ子におもふこと侍りて

子日にも引く人なくてふりにける身をあはれとや松も思はむ

霞

日にそひてさぞなこのめも春霞深くなりゆく三吉野の山

おなじ題を白川心性寺百首卷頭に

久にへんわがまつ山に萬代の春をこめてぞかすみたな引く

あさがすみ

あさがすみたてるを見ればいつしかとおぼつかなみし春はきにけり

山霞を

あさみどりかすみそめてぞあし引の山のかひある色はみせける

朝な夕なれても見ずば俤(おもかげ)のかすみやはてん春の遠やま

野山のかすみをめでて

霞たつ野山を見ればひととせのくはゝる老も打わすれぬる

杜霞

梢よりかつあらはれて朝がすみやゝはれそむる山もとのもり

河上霞

水無瀬川霞のみをのあらはれて一筋深き遠の山もと

水郷霞

一筋のかすみのうちや久世(くせ)かつら梅津大ゐのあたりなるらん

湖上霞

廣崎の心あてなるひともとの松もほのかに霞むうら〳〵

海霞

かぎりなき青海原に立わたる春の霞や天のうき橋

霞春衣

花鳥をあやにおもはへ春のきる霞の衣いくへたつらん

立そめし春の霞のうすごろもひをかさねてやそふ色も見む

鞠中霞

春ふかみ分けこし嶺の朝な〳〵霞にきゆる跡のとほ山

定靜が阿波の國よりのぼりて都に十五年の春を

迎ふるよしいひて「淺緣かすみの衣たちかさね

猶こゝのへの春にあひぬる」とよめるかへしに

十年あまりいつなれぬとも思はぬに霞の衣さや重ねつる

いたくかすめる日松のむらだちたるを見て

時わかぬ松の煙もかげろふのもゆる春日ぞ立まさりける

鶯

花になく心の色もおのづから音にあらはるゝ春のうぐひす

何事のはらだたしかる折にしもきけばゑまるゝ鶯のこゑ

初鶯

やがて此垣根や古巣けさよりの春つげそむる宿の鶯

早鶯猶若

心とく春告げ初むるうぐひすもまだ舌だみて聲の聞ゆる

朝ごとになくを

朝ごとにきなくうぐひすきなけ猶春知らぬ身も春と知るべく

山家鶯

山かげや柴のあみ戸をあけさして初鶯の聲をこそきけ

名所鶯

春寒きくらまの山のうぐひすはたどる〳〵や雪になくらん

あるゆふぐれに

鶯はそこともいはず花にねて古巣の春や忘れはつらむ

鶯聲和琴

雪寒き梅が枝うたふ琴の音にきゐる鶯聲あはすなり

うづまさ寺にて鶯のなくをきゝてむかしかでの

小路の家の松に朝ごと時もたがへず鳴きける事

などおもひいでて

鶯のなくこゑきけばいそのかみふりし都の春ぞ戀しき

鶯語漸々稀

鳴とめぬ花の梢はうぐひすのまれになりゆく聲にこそ知れ

野若菜

末遠き春野のわかなかぞふれば摘むべき千世ぞ限知られぬ

わかなつむ人につかはしける

たのむなよ若なといふはなき名にて年つむごとに身こそ老いぬれ

春の野に出でてといふ句を

年ごとの春の野に出でて摘みつれば若なや老の數を知るらん

古今集のことばをいれて春の歌よむとて

春日野のとぶひの野守老いぬらし幾よの春の若菜摘みつゝ

雪中若菜

つむことのかたみの若菜それをさへをしとや雪の降りかくすらん

むつき末つかた雪のふる日いかにふるやとかみ

さうじあくれば軒あさきいほにて爐邊にもさな

がらつもるべくおぼえければ

風さえて猶うづみ火のあたりまで春としもなく雪ぞ吹入る

いたく寒き夜

春寒み猶きさらぎのあつぶすまかさねてよもの嵐をぞきく

二月餘寒

ともすれは花にまがひてちる雪に梅が香寒き二月の空

餘寒月

更行けば猶かげ寒し春の月かすむと見しや雪げなりけん

のどかなる日松風をきゝて

松にふく春風ぬるくなりにけりいづくの山も雪はのこらじ

春草

いづれをか哀とは見む朽のこる霜のふるはもこぞの若草

雪はまだきえもはてぬを野べはやはや薄緑なる春の若草

春草短

おひまじる苔のみどりもわかぬまでまだはつかなる春のわか草

梅

日のめぐる南の枝の霜どけにぬれてほゝゑむ梅の初花

見し夢はあとなき花の下ぶしに梅が香深きかたしきの袖

太秦にてむ月六七日の頃軒の梅こゝかしこ咲き

たるを

かりそめに香をとめてこし花のもとになれてみとせの春もへにけり

梅にそへて布淑が「鶯のねながらとまで君がた

め思ひをりける梅の枝ぞこれ」といへるかへし

うぐひすのあかで別れし花のえをとひかも來べく匂ふ梅が香

夕梅といふことを

花の色はたそがれ時の垣ねみち行過ぎがてに匂ふ梅が香

闇夜梅の繪に

にほふより木立ながらに思ひやる心のうめは闇もかくさず

ある人の讃をもとめし梅のゑを打おきしに見出

でて

うゑしよりいつしか見むと思ふまに年も立枝の梅咲きにけり

雪中梅

ねたしとて花をば雪のかこふともいかゞはすべきにほふうめが香

梅度年花

梅ならで何の草木か玉くしけ二とせかけて咲にほふべき

座主宮より春風先發苑中梅といふ題にして歌め

されけるに

こと木には吹くともわかぬ春風をけさぞみそのの梅の初花

野梅

さしてゆくかたもなけれど香にめでて梅さくのべは遠く來にけり

閑庭梅

咲きぬやと人もこそとへ梅が香を垣ねの外に風な誘ひそ

梅薫袖

見ぬ人のためとてをれる梅なれど花のにほひは袖にこそしめ

梅香留袖

梅が香は人をもわかず日を重ね立よる袖ぞふかくしみける

風搖白梅朶

さえかへる風の立枝の友ずりに花ぶさながら梅やちらまし

伏見山の梅さく頃はかならずとひてんとちぎり

待りけれど久しくかぜのこゝちにわづらひ侍る

ほどに頃も過ぎぬなりときゝて荷田何がしがり

いひ遣しける

さく花のあたりをいとふかぜのまに契りし梅の折も過ぎぬる

紅梅の木たれたる繪をもて來て讃をこふに見れ

ばその枝に短尺を付けたりそれに

紅(くれなる)は人のめにつく色ぞかしあまりこたれてあだにをらるな

柳

青柳のいとへだてても見つるかなよりきては猶まさるみどりを

門柳

春くればさゝぬることなき賤がやの門の柳のいともめづらし

春くれば人ぞとひけるかくれがの門の柳のいとはしきまで

隣柳

青柳のいとをとなりに見る宿は思ひかけずぞ人にとはるゝ

門柳

かげひたす門べの柳風ふけば水のみどりの色ぞわかるゝ

岸柳

川風になびく霞の絶間よりかつ見えそむる岸の青柳

柳絲綠新

あら玉の春のやなぎの淺みどりいとくりかへし幾よへぬらん

の繪に

淺みどりよりて見ぬまに青柳のいと深くこそ春もなりぬれ

早蕨

都人とはずは春もつれ〳〵とひとりやをらん嶺(ね)のさわらび

うづまさにて庭のわらびもえいでぬる頃

足曳の山の櫻は咲きぬやと垣ねのわらびをり〳〵ぞ見る

やよひ初つかた仁和寺わたりの花見てならびの

岡にやすらひたるに雨降出づべくおぼえければ

立かへるに母のすきたまへればわらびをとりて

かへりつさきのさがのかへさにもたづさへかへ

りしなどおもひ出でて

西山の花見てかへるをり〳〵のつともかはらぬ嶺のさわらび

桂より布淑が「かつら鮎とると出立つ道のべの
わらびをさへにけふ奉る」とて二くさおこせたる
かへし
かつら鮎かはべのわらびとり〴〵にをりを過さぬ春の音づれ

春　月

暮ふかく霞こめたる花の色もほの〴〵見えてにほふ月影
去年(こぞ)よりもかすみそひつゝ春ごとにわがよのふけをみする月かげ
中空に見るかげよりも春の月いづさいるさは猶ぞかすめる

江春月

そことなく夕しほみちてかすむ江の春のみるめは月にこそあれ

春　雨

春雨のあやおる池は時わかぬ水のみどりもそふかとぞ見る
梅柳のさかりに雨のふる日

梅かをり柳けぶりて糸雨のつれ〴〵とふる春の日長さ
朝に庭の面しめりて雨ふりしけしきを見て
ふるとしも知らでねし夜の春の雨をあけて見るこそのどけかりけれ
小雨ふる夕暮からすのなくを聞きて
小雨ふる春の夕の山がらすぬれてねにゆく聲ぞ淋しき
雨の音のすれば櫻の梢いかならんとて
春雨の音きく度に窓あけて軒の櫻のこのめをぞ見る

遊　絲

春の日のゆた野のはらに遊ぶ絲のいつくるべくも見えぬ空かな

春　曙

露の身を常にもがなと思ふまで心ぞとまる春の明ほの

歸雁知春

一年はわすれて立ちもおくれなんかすめばかへる春のかりがね

春曙雁

行くかりも別れがたみやねに鳴きてかへりみすらん春の曙

夜歸雁

春の夜の夢のまくらをとひすてて闇のうつゝに歸るかりがね

いとあたゝかなる日かげにありて打ねぶるにけ

ぢかくきじの鳴くを聞きて

人めなき垣ねのきゞすねになきて春の眠をおどろかしつる

よぶこどり

いづこぞやよぶこの山のよぶこ鳥霞がくれの夕ぐれの聲

ひばりを

霞わけ今かおつらし夕ひばりはるかに聞きし聲の近づく

雲雀落

野べ近き垣ねに床やしめつらんかすめる軒にひばり落つなり

春駒

のるこまのうらやましとやいばゆらんとりもつながぬ春の野飼を

花の歌

一年の花てふ花をつくしてもさくらにたぐふ色やなからん

長閑なる頃しもさきてとくちるぞ花のめでたきいはれなりける

あだなりと花やかへりて思ふらん常なき色にそむる心を

みやづかへせし時殿にて常にある所の軒端の花

のさかりなるに人々の大なる枝どもおろしてと

りどりあかれゆくにおもひしこと

をらでたゞかくながらみよ庭ざくら風のさそふも惜くやはあらぬ

こゝかしこ花咲きたりときく頃雨風のはげしき

に

咲初めてさかりまたきに雨かぜのあわたゞしかる花の春かな

いつのとしにや彌生十日ばかりさが山の花見んとて伴資芳よぎぬみちなれば立よられぬ此ころは日ませに雨ふりてけふもいかゞなどおもひしによくはれたり朝戸出の寒きはれいの風などにをかされけるにやあらん

さくら花まちどほなりし年なれば盛もいまだ朝寒き空かくて打つれてならびの岡御室など過ぎ大井の川邊におりゐてはかなきことといひかはし遊べば心ちの物むづかしかりしもなぎぬ春の日もやゝくれて花の色のほのかなるころ涌蓮法師も來あひてきようにいりぬ月かすみながらさしていはんかたなくしづけし

大ゐ川月と花とのおぼろ夜にひとりかすまぬ浪の音かな

又ある時周尹のとひきてあらしの花見んとあるに打つれてゆく雨いたうふりいづ道もあしかりなんとていへにかへりしが夕つけてはれげに見えける時かの人のいへる

「春雨の雲もはれゆくあらし山日はたけぬともおもひたゞばや」かへし

よしさらばこよひは花の陰にねて嵐の櫻ちるをだに見む

二尊院に行きて何くれとうちかたらふにあらしの花も盛過ぎぬときゞて

春雨にふりはへとひしさがの山さればよ花のうつろひにけり

この近きわたりに涌蓮道人すみ侍りけるそのもとへとていひやる

草の庵にすます心のいかならん花のためうき雨風の空

あるとしの二月末つかた人々あまたさが山の花見にまかれりをりよくさかりにて花のもとにまどゐつゝ往事をおもふに年々この花になれぬれどこの二とせ三とせやまひにをかされてえとはずいたく老いぬればこむとしの春ともたのまれねば

櫻花見ざらん後の春かけて思へばいとゞかげぞ立ちうき

其折しもある人のもとより「ときぎぬの春ともいへるはいたくよにわびてけふのいでたちなど知らぬ身にしあれば花の錦にたちもまじらず」とも心にまかせぬとなるべしいとあはれにてときぎぬのおもひみだると聞くからに花を見るにも袖ぞ露けき

默軒がたちまにあるほど花の頃かれより「山ざくら咲きそめしより九重の都の春ぞいとゞゆかしき」といへりけるかへし

花といへばひなも都も常なきを何かはこふる九重の春

梅見にまかりありきけるころ東山にいとおほきなるさくらのあるを見て花の頃は又もとひこんなどいひたるを此頃思ひいでてひとり二人いざなひて尋行くに心あての花咲きぬと見えて山の半にし雲のおりゐたらんやうなり分のぼりて見るに半ちり過ぎたり盛をこそとはめと思ひしをいとくちをしこゝを如意寺といふときゝて

我が思ふ心のごとき寺ならば風には花をまかせざらまし

雪とふるころしもとひて山ざくら心あささを花にみえぬる吹のほる谷のあらしにさそはれて空にぞ花の雪はちりゆく

いかばかりしづけからまし山ざくらをり〳〵風のさそはざりせば

山ざくらちるこのもとは谷川の音も嵐に聞きなされつゝ

かゝることどもいひて木のもとにしばしまどろみ侍りて

咲く花の木かげならずは物すごき山の岩ねに旅ねせましや

やめる身はいとどあはれにおぼえて

こん春はいかでか見んと思ふ身に猶をしめとや花の散るらむ

あるとしの春さが山の花見にまかりけるに月くれければ大井の里にやどりて

大ゐ川かは音たかくなりにけり嵐の花に風すさぶらし

うづまさ寺にうつりすむ春さがの近ければまだしき程より花のつて聞くにおぼつかなからず

この春はさが山近く家ゐして花の便を聞かぬ日もなし

信言がもとより「おもふどちむれつゝとはんさくら咲く君があたりの春をつげこせ」といひおこせたるに

しづかにと住む山里の花ざかりむれつゝとはゞなしとこたへん

またさがの花の頃をとひたりしに

春寒きことしのさがの花なればやよひの末や盛ならましやゝちりぬべくきゝて行きて見るくるゝまでありてかへりがてにおぼえければ

又こそと思ひし花のさかりだにかへさはかげの立うかりしを

禪林寺あたりにえさらぬことあり行きて一夜あかしてつとめてかへるさにこのわたりの花年年見にこし事をおもひ出でて東北をかへり見るに如意寺の一木の花さかりなる行きて見ばやと

おもへど太秦にけふをすぐすまじきことのあれ
ばしひてかへるに

陰なれし昔の花をよそに見て我がすむ山に急ぐ春哉

廣前の花のもとを法師の過ぎがてに行くを

あだしよに心をとめぬ法師(のりのし)も猶かへりみる山ざくら哉

きのふひねもす風ふきあれこの曉雨おびたゞし
く降るによもの梢を思ひやりて

散りかたの昨日(きのふ)の嵐けふの雨いかでか花のたへてのこらん

花散りしより心ちも例ならず立るもことにくる
しう覺(おぼ)えければ

ちりしより立るくるしき老波は花によりてやしばし忘れし

ちりのこる花を尋ねわびて

花はみなちりはてにけり今よりは何にまぎれて春をくらさん

まどろみもあへず目覺(さめ)て蝶のとぶを見て

をしみかねまどろむ夢のたましひや花の跡とふこてふとはなる

太秦にあるほど花盛なるころゆふさりつかたつ
れ〴〵とながめるたるに道覺つと入來ていへら
く今朝より嵯峨山の花もてあそばせ給ふと宮の
おはしましたりけるがいかなるみこゝろにかお
ほんかへさ急がせ給ひつるが道の空にてろあん
がかくれたる蜂岡寺にあないせよと仰す今いら
せ給ふべしとく〴〵かどむかへをとおどろかす
にゆくりなければ塵うちはらふひまもあらでず
さなどがうかゞひ奉らんも畏(かしこ)く障子おしたてな
どして門邊に出づればはや御輿かきいれぬおま
したつかたにさうじ奉れば何くれのうたろんぎ

をも聞しめすついでにけふの御題つかふまつれ
とて給はせけるを開き見れば春夕花とありける
をやがてよみて奉れりき

立ならぶ松のみどりもわかぬまでくるゝ色見ぬ山陰の花

此宮のみこゝろばへのかたじけなさにこれより
ぞまうのぼることにはなりける

あらし山の花見にまかりて京の友にあひて

さけばちるさが山ざくら露のまの色にめでつゝ人にかたるな

宮のおまへにめしいでられていとのどやかなる
夕こゝかしこの花のみものがたりの序に翁が庵
の一樹はむかし紀宗直が南殿の種をうつしうゑ
たるが年ごとにはへどいまはさるよし知る人
もなくて蓬がかげに春を忘れず咲けるはくちを

しき花のちぎりにぞ侍るなど聞えあげしを例の
すたれたるをおこさまほしうおぼす御心にやあ
らんそれみそなはさんさかりつげよとのたまふ
にうちおどろきあしく申てけりとわきをかきて
いかでかさること侍らん入れ奉るべきおまし所
も侍らずいとかたじけなくとわぶれど花あれば
すなはち入るとこそいへ何かはくるしからんた
だそのいなしきのまゝにてとのたまふにいかど
はせんむぐら蓬のふる葉かきはらひふりたる松
かげにくさのおまし所まうけて待ち奉るはみち
とせになるてふ桃をもてはやせしきのふのなご
りなほのどかなるけふの空のいたくかすみて雨
にやならんとあやぶみしもいとよくはれ花もす

こしまだしくやと思ひしかどさかりみちて折に
あひたりいらせ給ひて御湯たてまつり御くだも
のまゐる夕かけておほみき奉り御おろしあまた
たび給はりゐひさまたれておのがよろぼひわた
るうしろでをも忘れてふたへにかゞまれる腰を
しひてのばしてあなたふとけふのなどうたひ舞
ふさまはえびのおよぐに似たりとをかしがらせ
給ふべしかうかしこみ嬉しみ思ふはもとのある
じのたまも我にとりつきてよろこびをそふるに
ぞあらんかし宮も興にいらせ給ひて欲倩遊絲繫
夕陽の御句玉聲ひゞけり慈延御次にはひわたり
めでまとひて御和を奉る「君がためつなぎとめ
なん絲遊のながきにあかぬけふの夕陽を」などや

うにぞきこえしげにも君が光にはひまの駒もつ
ながるべくぞおぼゆるけふゐたちけいめいする
うちさくら花をおきて思へることをよめる
さかりをやいそぎたるらんきのふまでふょめる花もけふは咲きぬる
くちをしと何かこちけん櫻花色そふけふもありけるものを
蘭省の花の程とて大君のとひますけふぞいろかのこすな
春をへて知られぬ花も今よりはとはれぞせましよもぎふのかげ
永きよのおもておこしをいのちにてふるきの花も久ににほはん
宮のたまへる御うた「春あきのながめつきせで
朝なゆふな老をやしなふ松の下庵御かへし
常に我みなみの山のことぶきを君がみあへにけふ奉る
都にかへりすめどいたくおとろへていでたょん
も物うくておもひやりつょのみあるに布淑が花

をたづさへ來りて「わきてとく咲きぬる花の心
にもまつらん人に見えんとやおもふ」と聞えしか
へし

をとゝしもこぞもことしも手折りきて君ぞみせける初櫻花

あるとしの二月十日ばかり宮より初花たまへる
に

この春はたまはん花を見んとてやけふまで老のながらへにけん

きのふのかしこまりにたへてはつ櫻をいたゞき
かはづふしにふしみみずがきにかきてけふこと
あげし奉る

はげみつゝ花も咲きけりよにひゞく君がことばの玉の光に

つまづかず咲きぬる花か人はまだ寒きひま行く駒にならはで

さす竹の君がみはしの初花はよにまれらなる種ぞあるらん

くれはとりあやにめづらし二月の望も待あへず咲けるさくらは

爛漫と咲きぬる見てぞ霜にまたしほめる老も春を知りぬれ

おくに

かくなんときこえあげてよかはづなくゐでの山吹をりもよからば

あるふるみやの花さかりなるいけべにてそこに

ある人らと物がたりする程水面に文見えて雨ふ
り出で山陰の池邊雨中の樹色のえもいはずおも
しろければ夕のかね聞ゆる頃までありてかへる

かぐらをかの東の路より畫見し山をのぞめば松
の色のけぶりたる中よりこゝかしこの花のくれ
のこる色のしづかなるけしきいはんかたなし

松の色は雨にくれそふ木の間より猶ほのみゆる山櫻かな

例のおほん方より御使とて御文ありひらき見れ

ば御詞はなくて「あかざりしこぞの遊びを思ひ
いでて又もとひよるまつのした庵」「しら雲をし
るべにこそはとひきつる庵のとぼその花はちり
しか」見もあへずいらせ給ひ暮ごろまでおはしま
すに御かへしたてまつる

塵をだにはらひもあへず松かげの苔をおましになすがかしこさ

御かへさもよほさるゝ頃野べに鶯の鳴きければ

うつりゆく花の夕のみくるまをしばしとぞなく野べのうぐひす

くるつあした雪のごとちるを見て

かきくづしけさよりちるは君がこん昨日を待ちし花にやありけん

昇道がさがの山櫻見しかへさにうづまさの花を
見て「古郷(ふるさと)となりにし宿のさくら花なつかしき
かに心とまりぬ」とあるにかきそへし

盛ぞときけばなつかし陰しめてよとせはなれし太秦(うづまさ)の花

寒暖ほどよくなりてこゝかしこの花の所もおも
ひやられつゝ

山櫻咲きそめしよりわたつみのおきな心も花になりぬる

曙　花

花はたゞ霞み渡れる絶間よりしらみそめたる明ぼのの色

見　花

春ごとに見るとはすれど櫻花あかで數多の年もへにけり

年々見花

見る友はとしゝゝかはる花の下になれぬとおもふ身はふりにけり

心靜見花

物ごとに心ちらねば名にたちてあだなる花ものどかにぞ見ろ

隔路見花

舟もがな波路さしはへかの見ゆる磯山ざくらたをりてもこん

翫　花

かぎりある花の日數をぬば玉のよのま見ざらんことのくやしさ

花未飽

わけのこす野山を多み櫻花心ゆくまで見し春ぞなき

依花待人

とはれぬはたがためかうき蓬生の花よ人めを待つけて見よ

花下送日

おもほえず立つにとやすき日數哉なれてもあかぬ花の下かげ

花下逢友

咲きしよりあひ見ぬ友の戀しくは花の陰をぞとふべかりける

花時無外人

咲きしより日ごとにとひて山守も木こりも花の友となりぬる

花自有情

外のちる頃しも咲きて山ざくら心ふかさを見するひともと

依花忘行

妹がりといそぐ心をわすれめや道の行ての花しさかずば

山　花

一むらの雲こそかゝれ山のはの遠き梢の花や咲くらん

山鳥のをのへの櫻咲きにけり長き日さらず雲のかゝれる

嶺　花

ちらぬまも心づくしを風越の峯にしもなど花の咲くらん

暖雨晴開一經花

春山の雨あたゝけきあと見えてかけぢに咲ける一本のはな

關　花

あしがらの八重山ざくら咲きにけり春の嵐のせき守もがな

磯花

春深き沖つしほ風吹くたびに花の波こす磯の松原

花林朧月

おぼろよの月もかげをやわきつらん花のはやしはさしもかすまず

雲花無定樹

咲くころと思ふ心に松杉もわかでやかゝる花のしら雲

古寺花

色に香にめでずは花のさがの山めぐりもあはじ法の輪の寺

山家花

いかなれやよをもいとひし山里の花の色香にそむる心は

閑居心

人とはぬ宿とて風のふかざらば猶靜にぞ花を見てまし

花麻

櫻花香ごめにぬさと散りしより塵にや神のまじり初めけん

花與春匂

誰か知るさけばかたみに匂ひそふ花と春との深き契は

老木櫻のゑを

我も老さくらも古木ふりせぬはあかぬ心と花の色香と

八重櫻のゑに信美が歌こふに

深くなる春の行へも一枝に思ひやらるゝ八重ざくらかな

春ぞすくなきといふ句を

かげなれん春ぞすくなき老が身はよしや日ごとに花を見るとも

長門介彦明が白詩選新刻なりぬとておくれりふ

せる枕上におきてをり〳〵見などすそがうちの

五言律を見て花下歎白髮を

しらかみにまがふ櫻をうつら〳〵見れどもいはん言のはぞなき

一乘法師が殘花を折りて「心ある人に見せずば山ざくらあだに散るとや花のなげかん」とよめるかへし

手折りきて君し見せずば花ははや散過ぎにきと我やなげかん

禪林寺に花見にまかりしに誦經の聲の聞えてあらしに花のちりみだれけるを

うべしこそ世は常なしととく法の聲のうちにも花ぞ散行く

志賀山越

こえなづむ妹が袂に咲きかけて花をかさぬるしがの山風

東山にあそび侍りけるにあらしの山にちりのこりたる花のみえしが夕かけていとさだかならねば

それとなくかすみはてても見し花の俤のこすゆふぐれの山

惜花馬蹄遲

乘る駒もふまじとや思ふちる花の陰ゆく道は過がてにする

花のころはと思ひしにもとはざりける人をおもひて

こぬ人をいつとかまたむあら玉の年に稀なる花も散りけり

落花

をしむとてとまるべきにはあらねども散る花ごとにあたらとぞ思ふ

ちるがうへに散行く見れば櫻花をしむ身のみや又のこらまし

讒見落花

この春のうきはまだ見ぬ木の本の花はいづれの枝よりかちる

落花を見て

さくら花今はとさそふ山風に心あはせて散行くもうし

花落樹猶香

木の下を猶にほはせてさくら花散りても人をあこがらせつる

夕落花

よしやふけ暮れなばなげの櫻花ちるをだに見ん春の夕風

月前落花

面かげを後もしのべとやよひ山有明の月に花のちるらん

夜思落花

をしみつる人はかへりて櫻ばなひとりやちらん夜の山かげ

河落花

よしの川ちりかひくもる水の上の嵐を見する花のしら波

海邊落花

櫻ちる春のみなとの追風に花つみそへていづる百舟

さが山の花見にまかれりけるにはやう散過ぎて

はべりければかひなくて山ふかく尋ね侍るに一

木ちりおくれたるがことさらにめでたくおぼえ

ければ

吹のこす嵐の山のさくら花盛をのみやあはれとは見む

殘花誰家

たれか住む庵のかきねの花一木よそには見えぬ春を殘して

深山殘花

おそく咲く花なりけらし山寒きをきその奥に見ゆる白雲

ひょなの讃をこひけるに

ひとかたにうきをはらはゞ咲く花のもゝよろこびのみの日なるべし

彌生三月いたいたうさむかりけるに彌清がかつ

らにかへるにつけて布淑がもとに文つかはすか

へりがきに

まち〳〵し春の寒さはさくもゝの三千とせをふる心地こそすれ

苗代

種蒔きていくかへぬらんみごもりに薄もえぎなる小田の苗代

河苗代

こむ秋のたのみもさぞな河ぞひの苗代水はゆたかにぞひく

いたくかすめるにかへるのなくをつらねうた

霞そひくもれる春の夕暮に池のかはづの雨こひてなく

ほどもなくふりいづ

こひてなくかはづの聲やきこえけん天津空より雨くだるなり

雨くだる夕の空をながめつゝ入相のかねの聲をこそきけ

夕蛙

春深きるでのわたりの夕ま暮霞む汀にかはづ鳴くなり

大根の花麥の中にまじれり

白妙の大根の花は雪に似てもゆる草葉と見ゆる麥畑

菜花のさかりなるころ山吹もさけりければ

山吹も菜もうき花の色ぞかしさけば近づく春の別路

菫

あかずしてくるゝ春野の露ながらつめるすみれに月ぞうつろふ

紫のすみれの花のにほへばやなべて春野のあかず見ゆらん

古砌菫

あれはてて野となる庭のすみれ草爰ぞ昔の垣ねとやさく

つゝじ

旅人のいほる山べにたく火かとこぐれにみえて咲くつゝじかな

樵路躑躅

白妙のつゝじ花咲く柴人のかへるさ遅き頃もきにけり

杜若

水かれてふるき澤べのかきつばた咲けるわたりや八橋のあと

かきつばたを折りて人におくらんとて手づから
もてまうで行きけるに
杜若しほれやすると道すがら袖に日かげをへだててぞこし

夕山吹

暮行くをおのが色とや夕露に咲きものこらぬ山吹の花
おもふことといはでやけふも山吹のくるゝまがきを人もとひこず

里山吹

山吹のさかりとなればやへ〳〵の人もとひけり玉川のさと
光あるさとは玉川やまぶきのさかりは人のむれてこそとへ

笆山吹

しめゆひしまがきも見えず山吹のやへにかさなる花の盛は
かつらよりあゆに山吹をかざしておくれるに
いはぬ色はいづことさしてわかあゆのかざしにくめば玉川のつと

慈照寺にあそびけるに池の藤はいまだしくてそ
れかあらぬかなどいひてかへりざまに
咲くもまだおぼつかなきを立かへり又こそとはめ藤波の花

折藤

をりて見む夏をかけては匂ふともかへらぬ春の藤波の花

池藤

いつしかとふぢ咲く池の水かゞみうつりにけりな春の日數は

松間藤

松の色の又一しほのふぢかづらかゝれとてしも花はさかじを

雨中藤花

そぼちつゝ折りけんぷぢのふることもかくこそ雨のけふのぬれ色

春煙

春寒き松がうら島かすませて心あるあまや烟立つらん

春夕

そことなく花の香かをり櫻色になべてかすめる春の夕暮

春獸

春とてもとまらぬひまの駒なるをのどけきかげとなどかたのみし

春のとく過るを惜しみて

梅ちりて柳さくらとうつるより見るゝ花の春ぞたけ行く

暮春月

をしと思ふ春の日數はくれそひてよなゝおそき有明の月

暮春花

さきちるは程なき花のさかりをもまたでや春の暮れて行くらん

江上暮春

けふの日も入江かすみて行く舟の跡なき波に春ぞくれぬる

山家暮春

山ざとの垣ねのわらびをりに見し人めも絶えて春ぞくれ行く

旅宿暮春

雁もいぬ春もかへりぬくさ枕たびにやひとりわがのこらまし

此十日あまりまでに花はちりはてたればやよひの末つかたはたゞ青葉のみしげりて夏にもかはらざりければよめる

花もなき春の日なみの末の山夏にこゆとも色はかはらじ

春の別

うつりゆく春を惜しむもあす知らぬ身を歎くとや人の思はん

殘春

花鳥におくれて又や此春ものこる日數をひとり惜しまむ

殘春二日

けふくればあすもくれなんあすくればことしの春は殘らざるべし

春光只是在明朝

春はたゞ明けんあしたを限ぞと思ふこよひのいやはねらるゝ

三十日に

きのふまで猶けふありとたのみしをそもかたぶきぬ春の日の影

三月盡

暮れぬるか春はこてふの夢のまになれ見し花を俤にして

三月盡夜

まどろまで猶ぞをしまむ花鳥の春も一夜の夢とこそなれ

天明八年の正月はての日かも河の東なる小家より火あやまちたるが風あらましく吹きて時のまにひろごり内裏よりはじめみやこの家ゐのこりなくやけたりしかばおのれもすむべきところなくて二月十三日のゆふべより太秦十輪院にうつりすむ此寺十とせばかりすむ人なしひろき寺のいたうあれたる所なりうつりける夜ことのほかさむくよもすがらいもねず

荒れにけるはちをか寺の旅ねには春さへ寒し身をさすがごと

よあけて見れば軒に梅ありいとよくさけり都は一木ものこらずうせたるをも知らぬさまなる色香なるもあはれにて

よはなれて人もすさめぬ梅なれや思ひの外の春にあふらん

これも都にさきてましかばいかでかこたびの烟にもれましとぞおぼゆる

わらはやみしてをこたりぬれどいたうよわくなれゝば今は京にかへりてをといふにまかせて住なれしうづまさ寺をいでくとて

あら玉の年の四とせをふる寺の別は春も袖ぞ露けき

こぞより心ちそこなへれどおどろ〳〵しくもあらねば寒さにたへて此頃まではかくあれどこの後をり〳〵あしくてふしおきしつゝあるに二月十五日夕よりことの外心ちあしくいにし年のわらはやみのことあつしくなりて何事もおぼえずあかつきがたすこしさめたるに人々あまたたすけなどするを見てよべのことをとひ聞きて知りぬこれよりあつしさはさしもあらでうちふしてあるに三月朔日頃すこしくふ物の味などいできたる三日に又ありしごとあつしくなりぬ四日より又すこしをこたり侍り瘧にあらず疫にあらでいとあやしければこたびは中にし何がしといふ醫師にちぎりしことあれば藥をうく日をへて快けれど老病つかれすみやかにいえがたしなす事もすべてやめて此うちの所爲にはおもふことあれば人してかい付さすあけぼのにとことはにあかぬの山のいつにかはおもひくらべん春の明ぼの

夜のあくるを待わびてやみぬれば夢ばかりなる春の夜も明るまつまぞ久しかりける

よもすがら雨ふるこゑかしこもる音をやみなくいもねられぬまゝによめる

もる音にいのねられぬは春雨のふるやにたへてすめばなりけり

むかしの住家も漏りて床かへてねたる夜のことなどおもひいでて

雨もりてねざりし夜はおもふにも身にはふるやぞ契ありける

初春の頃上田餘齋がとひし後これよりいひやる
「いと〳〵うとく經し我をとひ給へりし御心ざし
のうれしさ言にもつきぬを筆にはいかでと思ひ
ながら禮をだにとてなん去年見奉りしよりはゐ
たちおももちいといたうわかやぎたまへるなん
道のためにもいとゞたのもしうこそおぼえ侍れ
寒さもいましばしならんいとようしのぎたま
へ初春のつどひおほしいでて梅何くれと心よせ
たまへりしに老たる馬の重荷おふに小付とやら
ん病にさへなやまされ寒きにうててはこたへせ
で過ぎつるつみさりどころなくなむ」
言そへてたまへる梅ぞはつ春の草のむしろのみやびなりつれ
藥たまへるうれしさに

わかえつる君にあゆやとたまへりし藥のみつゝいかむとぞ思ふ
新室のもよほしをきゝて
とくたてよさらばみやこに住みぬべき心おちゐん君がにひむろ
心ちそこなひてこもりゐけるほどまれに見いだ
すに日のうら〳〵とてるを
いたづらにねてもふるかな花みてもをしかりぬべき春の永日を
風のこゝちにてわづらはぬ人なかりける春みづ
からもやみて
みな人の身にしむ風は春ごとの花にいとひしむくいなるらん
櫻のちるしたにこねこのざれたるかた源氏物語
の心と見ゆ
思ひ入る身こそ及ばねこの人よなどすのうちの花にむつれぬ
朝ごとにこのあたりありくに草川の水のあせた

るを見て

朝な〳〵かれ行く水や草川のをちこち分る苗代の頃

室　山

室山の老木ももとは若櫻世にめでられし花にやはあらぬ

蘆屋里

あま人のわがすむかたもたどるらし霞む夕のあしのやの里

千葉野

おもふことちば野の春にもえ出るこのでがしはのいつかひらけん

鹽竈浦霞を

しほがまの烟もかぎりあるものをうらの名だてに立つ霞かな

末松山花

松かげに咲ける櫻は末の山したより浪のこすかとぞ見る

古人のよめる詞を題にして人みなによませみづ

からもよみける春の歌の中に

残りたる雪にまじりて山里の垣ねはだらに生ふる若草

子日(ねのひ)とてかずまへられればあづさ弓おしてもとはめけふのまどゐに

とくるかと見るほどもなくこほりけりまだ春あさき池の水なみ

梅がはら鳴くうぐひすにすかされて花もやさくと尋ね來にけり

明そむるみねの霞のひとなびき春のけしきは花ばかりかは

こよひ誰やすいもねずにみよし野の花ちる山を月に分くらん

とき駒に猶むちをこそへてけれ花もやちると心はやりて

ちりがたのみねの櫻に風ふけばをしむ心のそらにこそなれ

ながからぬこのよなるまは春の日のゆほびかにてぞ經(へ)ぬべかりける

をとめらが袖ふる山のすそべらの赤く見ゆるは岩つゝじかも

なはしろのあづくる賤(しづ)もちる花のせきとめがたき春やをしまん

すきかへす春のあら田をたつ雲雀(ひばり)いづくに草の枕かふらん